



第231号
発行所 小田原史談会
小田原市東町 1-21-18
平倉方 TEL (34) 8363

小田原宿と浮世絵

〜貧しいコレクションから〜

杉山博久(幾一)

三〇代に入ってから、蒐集とも云えない貧しい作業を続けて来たが、それでも四〇年を超える歲月の間に、小田原宿を中心に、平塚宿から三島宿まで、それなりの数には達したことである。松島さんと青木さんとから、その小田原宿と浮世絵について、蒐集の想い出などを絡めながら何か書けとの強要?である。日頃、ご交誼を頂いていることとて、お断りも出さず、駄文を草することにした。いたずらに誌面を穢すことに、史談会の皆さんのご海容をお願いしたいと思う。

(一) 繁盛する小田原宿

小田原宿は、江戸から二〇里一〇町(約八〇・六km)ほど、九番目の宿場であったが、また、大久保氏一萬三千石の城下町でもあったから、『新編相模国風土記

稿」にも、

宿内本陣四(宮ノ前町、欄干橋町各一宇、本町二宇、建坪二百二十九坪半より二百九十七坪半に至る)、脇本陣四(宮ノ前町、中宿町各一宇、本町二宇、建坪八十四坪半より百八坪に至る)、旅籠屋九十五(凡三等、上十六宇、中二十三宇、下五十六宇)且茶肆(ちやし)市塵(して)軒を連ね、繁富の地なり、と、相応の繁華ぶりが伝えられている。「天保一四年 小田原宿大概帳」で、本陣・脇本陣各四軒、旅籠屋九五軒とあるのは、それらが同じ時期の成立であるから当然としても、一八五六年(安永三)の「辰年宿賄請払勘定帳」になると、旅籠屋は八八軒と七軒ほど減少している。一三年ほどの間に、七軒もの旅籠屋が廃業してしまつたらしい。



広重の「狂歌入東海道」と信じて購入したが… (5頁参照)

小田原からは、箱根八里(約三一・四km)の山路であったから、上り下りの多くの旅人が小田原宿に草鞋(わらじ)を脱いだであろうが、それにしても、百軒もの旅宿があると、その経営も大変だつたようである。旅籠屋の亭主たちのなかには、酒匂川に近い網一色村の辺りまで客引きに出向く者もあつたらしい。少し年代的に遡るが、『東海道中膝栗毛』の二人は、ここで声を掛けられている。網一色村からは山王原村を経由して江戸口見附まで一二町余(約一・三km)、見附から旅籠屋の建並ぶ宮ノ前町や本町までは七町(約七六〇m)もあつたから、ずいぶんと遠方まで出張つたものである。

二三一号(平成二十四年十月号)目次

小田原宿と浮世絵

〜貧しいコレクションから〜 杉山博久… 1

小田原大秘録 卷一から卷三までの読み下し文 鳥居泰一郎… 6

明治三十五年九月 「小田原大海嘯」と被害状況 平倉 正… 8

小田原の郷土史再発見

老中・大久保忠真の人材抜擢と川路聖謨 石井啓文… 12

史談雑記帳

瓜生外吉海軍大将の胸像… 17

小田原藩 浅田兄弟の敵討 『孝貞義鑑』散策(14) 鈴木 好… 18

じいさんは「関東大震災被害報告」の警察官 井上仁男… 22

関東大震災被害報告 震災の一般的な状況、皇族貴顕の警戒 ①… 23

旅のつれづれ俳句日記 劍持芳枝… 27

初詣の御案内… 27

落穂集・特別賛助会員… 28

その『東海道中膝栗毛』では、「きさまおだわらか。おいらア小清水か白子屋に、とまるつもりだ」と、弥次さんの口を借りて、小清水屋と白子屋の名を紹介しているが、一八五八年(安政五)新刻の『五街道中細見記』にも、その小清水屋伊兵衛ととらや三郎が記載されている。

小清水屋と白子屋は、宮ノ前町と本町の旅籠屋であり、とらや(虎屋)は中宿町の脇本陣であった。弥次さんは、宿の亭主に、「女はいくたりある」、「きりやうは」などと確かめているが、小田原宿もたくさんの飯盛女を抱えていた。平塚宿や大磯宿に比べると、小田原宿の飯盛女はやや高価であったと云う。

旅籠屋が飯盛女を抱えるようになる、やかもすると風紀が乱れて、女性や子供が安心して泊まることが出来ないような弊害を生じていたらしい。そうしたなかで、「浪花講」や「江戸講」などの講組織が誕生し、その「定宿」と指定する旅籠屋では、飯盛女などを勧めることもなく、心安く宿泊出来るような措置も考え出されていた。

『浪花講定宿帳』には、宿泊がとらや三四郎、休所が羽鳥屋安兵衛となっている。安政年間(一八五四〜一八五九年)の刊行と云う『大日本早見道中記』にも、この

とらや三四郎と羽鳥屋安兵衛の二軒が紹介されている。羽鳥屋安兵衛は東の見附外とある。手元にある『大日本早見道中記』は、友鳴松旭画・筆の彩色、木版摺りの、本来は綺麗な案内図であったと思われるが、もう、随分と疲れている。確か、中学生の頃に購入したものであるが、旅人が懐中していたものであるから、傷むのも当然のことかも知れない。もつとも、疲れ本であったから、中学生の私にも手に入れることが出来たと云うことだろう。



(二) 名物あり難所あり

一七世紀の中頃に成立した『東海道名所記』には、小田原宿の名物を記して、

小田原石、水道のために、江戸に出し、あきなふ。小田原足駄、けやきのまる木履なり。夢窓枕、又宿の右の方に、外郎あり。東海道第一の名物也

とある。小田原の石材は、築城ばかりでなく、江戸の街造りにも一役買っていたらしい。が、一八三九年(天保一〇)刊の『諸国道中袖鏡』になると、

ういらう名物也 鱈た、紀梅つけもうる也

と、「ういらう」のほかは、小田原名物もすっかり様変わりしている。

「歌重」(広重)と落款にある「五十三次」(小田原)では、「ういらう」と「い可た、き」などに見える。

『五街道中細見記』では、

名物 いかのしほから 古梅づけ うぬらう かすづけ梅ちやうちん

とあって、「ちやうちん」も名物に数えられている。俗に云う「小田原提灯」であろう。

箱根山が海道の難所であったことは云うまでもなく、『新編相模国風土記稿』(土橋 三枚橋)にも、

橋を過れば、道次第に崎嶇(きく) 往來甚艱めり。

と、強調されているとおりであるが、酒匂川を越えることも難儀であった。酒匂川の架橋は一八七六年(明治九)であったから、それ



「歌重」の「五十三次」(小田原)

かち王(む)たり冬は土橋かゝる 近年水高く 往く王んなん義の所なりとある。従前は三五文であった平時の人足賃が、一八二二年(文政五)以降は四六文に

以前は、冬場を除き、徒歩渡りであった。旅人は、川越人足の担ぐ輦台(れんだい)や肩に乗り、川越えをしなければならなかった。川越えの人足には、酒匂・網一色・山王原の三ヶ村の人びとが当たり、その雇賃も定められていたが、実際には、法外な渡し賃を強要する無法者も少なくなかったよう

諸国道中袖鏡	
東海道	中山道
加判金沢	加判金沢
城山	城山
小田原	小田原
...	...
甲府	甲府

加銭され、増水時には六二文と定められた。「近年水高く」とは、常に増水時の賃金を要求されると云うことを意味するのであるうか。酒匂と網一色村の外れには、川会所と高札場が置かれ、川会所には名主・組頭・川頭などが詰め、川越えのことを司っていた。高札に、人足の心得を示して、旅人と相対にて賃銭取べからず、并に旅人をいひかすめ、札銭の外一切取まじき事とあるのも、不心得な人足のいることを示唆していると思われる。長雨による川止めは、旅人にとつてとりわけ難儀であった。水深四尺五寸(約一・三六m)で、「三合水」と云って川止めになった。川止めには、皆難渋した。

『東海道分間延絵図』には、中洲を繋いだ「仮土橋」が描かれているが、橋は一〇月五日から翌年の三月五日までの間を限って仮設されたものである。

『続未曾有記』に、  
 冬春は橋かゝる。小田原へ納米を運ぶ為にす。  
 と、架橋の理由が説明されている。面倒な酒匂川の川渡しを避けて、上流の飯泉に迂回する旅人も見られた。これを「上手廻り」と呼んだが、飯泉には渡船場があって、五月の初旬から九月にかけて、渡船二艘が置かれていた。

(三) 「歴史ボーイ」の買った  
 浮世絵

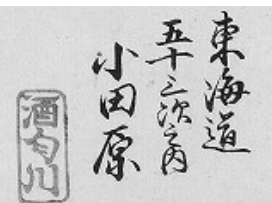
そんな城下町・宿場町であった小田原に私は育ったが、私が物心付いた頃の街なかには、もう、城下町や宿場町の風情はなにも遺っていないかった。わずかに、其所此所に聳え立つ老松や、銀座通りの桔梗屋などの老舗の店構え、さらには、身近に遺る町名に昔の面影を偲ぶばかりであった。

私の家は、幕末の台場の址に在ったから、親戚内では「お台場」と呼ばれていた。本家は、萬町(よろずちょう)の、(表通り)と呼んだ旧東海道に面していたので、一寸訛って、「よろつちよう」と云った。青物町(あおもものちよう)の叔母の家も、「あーもんちよう」であった。別に屋号と云うほどに洒落たものではなかったが、日常生活のなかに、旧くからの地名が浸透していたのであった。子供たちの世界でも、「三時に、大工町の角で」などと、ごく自然に使われていた。

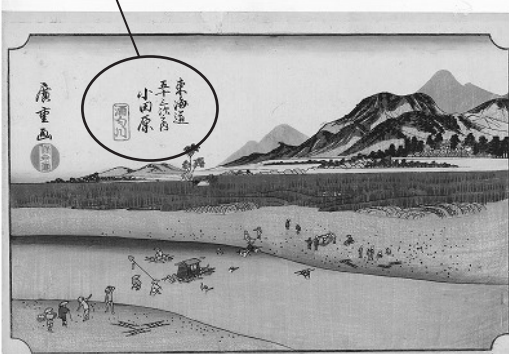
「萬町」も「青物町」も、そして「大工町」も、「一九町八小路」と総称された、城下町らしい小田原の旧い地名であったが、学齢に達する以前から、年寄りたちに聞かされていたものであった。街の北外れの広小路など、子供たちの世界からは縁遠い土地の名も、何度も聞いているうちに身に付いてしま

てしま、また、自然と地名の由来を考えるようになっていた。そんなことで、小学校の中・高学年になる頃には、私もいっぱしの「歴史ボーイ」となって、古書店に『足柄下郡史』などの郷土史の書物を求め、小田原の歴史を読み覚えていたのだ。いまのオリーブクビルの処に在った「大八洲」は、恰好の古書肆(しょし)であった。また、私が通っていた小学校は、城址の旧二の丸跡地に在ったから、放課後など、荒れ放題の本丸斜面下で古瓦を漁り、物資のなかったあの時代に、何処で、どう工面したのか、大判の和紙を手に入れて、城絵図を模写し、また、一八九四年(明治二七)刊行の『改正新刻 京都新図』などを真似て、史跡や寺社を辿る観光マップのようなものを描いては楽しんでいた。金粉や銀粉の塗料など、何処で手に入れたのだったろうか。

そんな私が、初めて浮世絵を手にしたのは、一九四九年(昭和二四)の秋の終わり頃であった。その日、私は学校からの帰り道、少しだけ遠回りして、幸町(現本町)の関東配電(現東京電力)の社屋前



拡大画



広重「東海道五拾三次」

に出た。其所は、市内電車の車庫もあり、電車の入れ替わりもあって、子供たちの興味を惹く場所であった。と、その東京電力の並びに在った骨董店のショーウィンドーに、広重の小田原の版画が飾られているのに気が付いた。保永堂版「東海道五拾三次」の小田原であったから、私は、ただ欲しくてたまらず、父に強請(ねだ)って、小学校の卒業記念の前倒しと云うことで購入してもらったのであった。

敗戦直後の混乱期であり、我が家には、浮世絵の画集などなかったし、まして広重の版画など眼にしたことはまったくなかった。が、絵柄だけは知っていたのであった。多分、なにかの挿絵で見えたのだろう。この絵は、私がいまでも大切に保管している一枚で

ある。ただ、真贋を云えば、これは後刷りでもなく、一口で云えば複製品であった。「東海道五拾三次」の「拾」字が「十」に換わっており、山容や河原にいる人びとの姿は、保永堂版の「変わり絵」と呼ばれるものに近いものである。複製品であつても、私には想い出の深い一枚であるから、いまでも大切に保管している。

#### (四) 広重の酒匂川越え

保永堂版東海道五拾三次は、広重の出世作であり、このシリーズによって、広重は風景画家としての地位を確立したと云われるが、その広重は、東海道物の小田原では酒匂川の歩行渡しを描くことが多い。私を知る限りでも、保永堂版のほかに、行書東海道・隸書東海道(丸清版)・隸書風東海道(林庄版)・人物東海道・葛屋版東海道(中版)・有田屋版東海道(小判)などがあり、美人東海道(五十三次図会)の小間絵や、豊国との双筆五十三次でも広重の描く風景は酒匂川の渡しである。たぐさんの歩行渡しを画いていると、マンネリ化してしまい、面白味に欠けるようになるが、五十三次細見図会ばかりは、川越えの順番を争つて騒ぐ人足と、川会所の役人であろうか、それを宥(なだ)めたり、籤(くじ)を片手に、負けずに大声を出している姿

がユーモラスに描かれていて面白い。実際に、こんな諍いもあったのであろう。

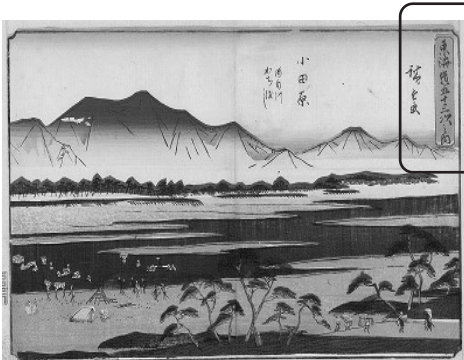
林庄版東海道は、紅地の短冊形枠内の外題は隸書風であるが、丸清版隸書東海道とは別のシリーズで、小田原までで出版が途絶えたと云う。そんなこともあつてか、保永堂版東海道の初摺りとともに、なかなか出会うことがなかった。保永堂版東海道の初摺りは、親しかった横浜の浮世絵商が、「珍しいから持っていないさいよ」と云つて渡してくれたものであつた。保存は良くないが、カタログなどでも見掛けることはほとんどなく、あの時受取らなかつたら、未だに入手出来なかつたかも知れない。版画であるから、かなりの数が印行されている筈であるが、欲しい物を一度逃すと、容易に廻り会えないのがこの世界である。だから出会いを大切にしなければならぬ。まさに一期一会の心境である。

保永堂版東海道の変わり絵は、需要が多く、版木が摩滅したことから、再刻したものとも云われるが、内田 実は、小田原は三種あつて、「いずれも広重の筆でない」としている(『広重』一九七七年)。行書東海道にも、絵柄は同じだが、色遣いの異なつたものがある。版元が江崎から山田に移つたことによる相違と思われ、箱根の場

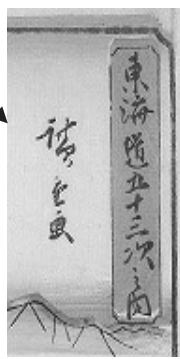
合、山田版では「江奇」の印が削除されている。蒐集を続けていると、こうした点も気になつて、次第に範囲が拡大してしまうのである。

その行書東海道の小田原に、見当を付け損なつたのであろう、すべての色が一皿強ほどずれたものがある。江崎版であるが、摺り損いを市場に出したのは、単純に気が付かなかつただけのことだろうか。なにか事情があつたのかと勘ぐりたくもなる。そこに美術館の極美品からでは味わえない面白味がある。

人物東海道に画かれた旅の女性、四人の人足が担ぐ簡素な輦



「行書東海道」 色がずれている



右上部拡大図

台を利用しているが、輦台には、豪勢な高欄付輦台もあり、一二人もの人足が担ぎ、二人の人足が先導した。輦台を用いなければ、人足の肩車に乗るか背負われることになるが、広重の酒匂川の絵では、肩車ばかりが画かれている。『新編相模国風土記稿』の酒匂川越場の記述には、

日々二十人(東西涯各十人、)河涯に出、赤體行人を肩して渡せり、又輦臺越をもなす、

とあり、大井川のように、背負つて渡すことはしなかつたのであろうか。それにしても、女性の肩車での川越えは、ずいぶん勇気のいることであつたであろう。広重は、そんな光景を人物東海道の島田で描いているが、酒匂川の渡しでは、国貞の芝居絵、「大々叶大繁昌酒匂川」に、女形の岩井条三郎が人足に肩車されている図が見られるだけである。

#### (五) 浮世絵の外郎

北齋にも、東海道物は五点ほどが知られているが、広重のように、素直に小田原の風景を画いたものではなく、鶴屋版など、城の矢倉を背景に、見得を切る歌舞伎役者の扮する外郎売りを組合わせた図柄の作品が目立つ。役者は、五代目市川團十郎と云う。それらの北齋の四ツ切と判形が小さい作品は、概して摺りや保存が良く

ない。だから、美品を手に入れようとして、ついつい逃してしまふことになる。国貞も役者東海道で、外郎売りを画いている。

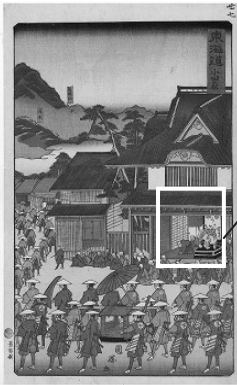
外郎売りは、歌舞伎十八番の一つで、一七七八年(享保三)、江戸森田座の「若緑勢會我(わかみどりいきおいそが)」で、二代目市川團十郎が演じたのが初演で、外郎売りの姿態風俗を真似て、外郎の効能を巧みに弁じたのが評判を得たと云う。外郎は、『東海道名所図会』に、

口中ノ臭気ヲ除キ 睡眠ヲ去リ 命ヲ延ル

とあり、海道の妙薬として人口に膾炙していた。『東海道中膝栗毛』の弥次さんと喜多さんの滑稽な会話に、丸薬を名古屋名物の「ういらう餅」と間違える粗忽者のいたことも知られるのである。



国郷「御上洛東海道」と拡大画



また、欄干橋町のなかほどに建つ八棟造りの店舗は、町屋には珍しい瓦葺きの豪華な建物であったから、海道を往来する人びとの眼を欲そばだてるものであった。国郷が御上洛東海道で画いているが、かなり簡略化されているが、それでも周囲の町屋に比べると、際だつて見える。店の正面に、虎の置物が飾られ、道行く人びとを睥睨(へいげい)している。ただ、この画には、一つ疑問がある。同じシリーズの箱根では、関所役人のすべてが土下座して家茂の行列を見送るのに、外郎家では三人が座敷に留まって居る。一人は、明らかに前掛けをしているから、主人ではなく奉公人と思われるが、こんなことが許されたのだろうか。『東海道名所図会』には、見開き二丁に、その外郎の店先の繁盛が描き伝えられている。

(六) 至福の一時

広重には、ほかに、沖に白帆が浮かび、海辺では網を引く、小田原の浜の風景を写した豎絵東海道(名所図会)や、浜風の吹き曝す海道を旅人が往く風景を画いた狂歌入東海道などもあり、北斎にも、宿外れの掛け茶屋を描写した永壽堂版・小田原などがある。その狂歌入東海道(一頁挿入画参照)では、失敗したことがある。静岡の古書展に、この画が出品

され、送られて来たカタログには、摺り・保存良好とあった。写真も掲載されていて、トリミングなどもなく良品に思えた。少し高値だなと躊躇する気持ちもあったが、欲しいと云う思いのほうが強く、注文したことだった。数日して送られて来た画は、確かに摺りも保存も良かったが、佐野喜版のこのシリーズは半切であるのに、一回り大きい複製品であったのである。以来、昵懇でない古書店のカタログでは購入しないことにした。蒐集を続ける過程では、そんな失敗もあった。

余計な話は措くとして、英泉や国芳などにも作品もあるが、それらは一覧表にでもしなければ紹介は難しい。従って、もう駄文を草することも止めるが、一枚一枚を丹念に眺めていると、いろいろな問題も浮かび上がって来て面白い。微醺(びくん)のなか、一枚の画に、勝手な空想を廻らしているのは、至福の一時と云える。

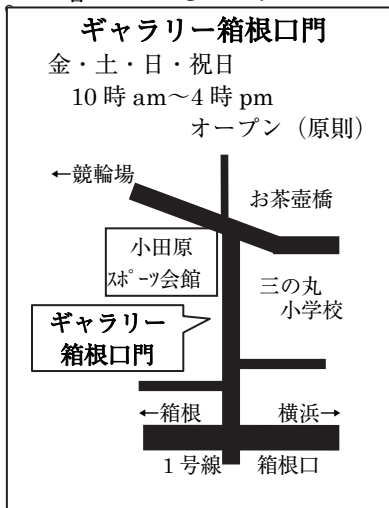
(七) 白秋も潤一郎も：

私の小さなギャラリー(ギャラリー箱根口門、三の丸小西門前、下図参照)で小田原の文芸を少しでも紹介したく、乏しいコレクシヨンの展示を繰り返している。宿駅と浮世絵の展示は、昨年春から今年の夏にかけて、宿駅ごと

が、小田原に關しては、頼朝の石橋山拳兵の図や會我兄弟の仇討ちの図などもあるので、出来れば来年以降にその展示を行いたいと思っている。今秋は「白秋と小田原」展を企画している。以前、中河与一が、「白秋も潤一郎も如是閑もかつて住みぬし小田原のまち」と詠ったように、小田原にはたくさんさんの文人が寄寓し、またこの街出身の文士も多い。文芸的雰囲気濃い街であったが、そんなことも忘れたよう

筆者紹介

南足柄市塚原に在住。五〇年ちかく考古学の研究に従事し、その間『直良信夫と考古学研究』(吉川弘文館)ほか数冊の著書・編著を刊行する。また、小田原市ほかの文化財保護委員等を二〇年以上にわたって努める。現在は、考古学史の勉強に従事している。



ギャラリー箱根口門  
金・土・日・祝日  
10時 am~4時 pm  
オープン(原則)

## 小田原大秘録(巻一から巻三までの読み下し文)

## 第二回 巻一の二

## 鳥居 泰一郎

以後の文章は、「古餘綾見聞志」の小見出し(渡辺武大夫と男達)ぶどうの水筒、男達制罪、武大夫不首尾のこと)の文章と極似しているので、最後に其文章も掲載した。

慶安年間の頃、番(幡)随院長兵衛ら神祇組の町奴が横行していた。それらを取り締まっていたのは天野十兵衛ら旗本である。

此時分、男達はやり別して江戸には神祇組と号して番随院長兵衛、大鳥一平、鵜権兵衛、唐犬権兵衛、放駒四郎兵衛、師人には山家甚五左衛門、是は山家流軍法を以て師範致し、虎の皮の引馬を率(ひきい)十萬石の格にて徘徊す。天下の諸公を門弟とす。

由井民部儒学は熊沢了昇、其外



水野邸風呂場の番(幡)随院

長兵衛

豊いもりの焼物、蕨の油揚げ、草瓢の漬物、その他種々の珍物にて十兵衛相伴にて馳走するといへども、武大夫少しも恐れず、

「是は、御丁寧に候得共、何も某はきらひに候」と申、箸をとらず、湯茶

数うるにいとまなし、猶又、御旗本には天野十兵衛、水野十郎左衛門、近藤登之助等男達めきて、右三家に行者(ゆくもの)無難に帰る者はなかりける。

天野十兵衛は、剛勇で評判の渡辺武大夫(忠職家臣)を虐めようとするが、渡辺は意に介さない。

時に当御家中渡辺武大夫は兼々剛勇の聞へありけるが、天野十兵衛是を聞て武大夫を招きける。渡辺大きに悦び、望むところなりとて、熊八百之丞という剣術、捕手の上手を草履取と頼み少しも恐れず、天野が屋敷へ至りける。然るに十兵衛は渡辺を嫩(なぶ)りて楽しまんと思ひ、膳を出しけるに笹の若葉に麦糖を入れ

て焚きたる飯、蛙の酢皿、

青蛇筒焼、いも虫の油揚げ、

豊いもりの焼物、蕨の油揚げ、

草瓢の漬物、その他種々の

珍物にて十兵衛相伴にて

馳走するといへども、武大

夫少しも恐れず、

「是は、御丁寧に候得共、

何も某はきらひに候」と申、

箸をとらず、湯茶

を吞ず、草履取八百之丞は玄関前であつて種々のたわむれ事して、居合の曲技、我草履を踏上げ抜打に四つに切り取と致す楽しみ、十兵衛是を見て膽を冷し、武大夫を色々もてなし、終に無難に帰しける事偏に、熊が手際と、渡辺が剛氣に恐れしところなり。

渡辺武大夫は番人の制止も聞かず葡萄の木を切り倒し平然と屋敷に帰る。

然るに武大夫屋敷に帰り、八百之丞をもてなし言様、葡萄の水筒は酒の味を出すと聞けれ共、未だ水筒になるべき葡萄の木は見当たらず、見当たる事あらば知らせよと語りけるに、其時八百之丞兼々承るところ御殿に候わん葛西小松川に公方様御上りの葡萄の木、大木なりと承る。是は御存に候哉と申しけるに、武大夫大きに悦び

「いや、はじめて聞たり。早速取よせべし。」

とて、八百之丞を戻し、直様(すぐさま)葛西に打立ける。夜明、かそこらにいたり、其所を聞出し、などもいわず、ぶどうの木を脇差をぬきて切倒したりければ、番人七八人六尺棒を引提て飛来り、狼藉者搦らめ捕れよと匍(よぼ)りけるに、武大夫にらみ付けて「手向かいなさば、切て捨ん。」と大音に匍り、我は盗賊にてはなし、不

届の奴哉と、銭三文出してあたへ遣わすべしとて、勇々と江戸屋敷をさして帰りけるは不敵なりける事共なり。此水筒今に渡辺が家に残れり。

渡辺武大夫は、葡萄の木を切り取つた犯人であると訴えられたが、それを全く意に介さない。

然るに此渡辺、人に負ける事をきらひ光陰を送りけるが、御上りのぶどうの大木狼藉者の為に失へりと届けたり。其外男達がましき儀多く辻切又は狼藉の類はびこり、後には御制事をも弁えざる事言語道断なりとて中山勘解由に仰付られ、御制道敷敷く召れ御吟味の上唐犬権兵衛に御尋ねあつて、汝男達と申が獣名を名付ける事いかかとの事なり。

権兵衛答えて、当公方様 右馬頭様と稱名奉りしと即答す。

かかる不法の者ども故、御制罪に行連(いかれ)ける。其者共には鵜権兵衛、唐犬権兵衛、放駒四郎兵衛、大鳥一平、鷲の爪金兵衛等悉く鈴が森に引出したり。此時渡辺武大夫は此者共と兼々ひたしくまじわり、行心も為たりければ、見物せんと緋襦子の次上下に時服をあらため金作りの大小りつぱに出立、人目を驚かす。大の男見物の中を押し分け近々と寄つて見物す。

此時流石の男達どもうらめし

げに役人に向つて、あの者も同類に御座候と申ければ、役人差図に依つて同心兩人、武大夫は前に来り、御自分も同類の内、あのもの申ければ、御大儀ながらあれへ罷出らるるべしと申ける。時に渡辺畏り候。然ながらあの者へ面会の上、一言相違無く申ばいか様にも御仕置を蒙るべしとて罪人どもは傍へ至り、武大夫大音に「われ此場に至つて、ひきふ千万不届のやつ哉。」と、たんつばきを仕掛けたりければ、彼者頭を下げて「是は是は御免下され可候。御人違に御座候。」と、申しければ武大夫役人向かひ、あの通り申候上は、御不審も候まじと申ければ、其通り相濟、武大夫虎口をのがれ何連(いずれ)も見物して、我家敷へぞ戻りけるは危ふかりける事どもなり。

以下は小田原大秘録と酷似している「古餘綾見聞志」の文章である。

渡辺武大夫と男達

然るに此時分男達はやり、別して江戸には神祇組と号して大鳥一平・高木仁左衛門・鷲爪金平・白柄組には番随院長兵衛・濡髪長五郎・放駒四郎兵衛・唐犬権兵衛など屈竟の者多し。御旗本には天野十郎兵衛、水野十郎左衛門、近藤登之助など、男達右三家に行もの無難に帰る者なし。時に當家中、

渡辺武大夫と云者、兼々剛勇の聞へありければ、天野十郎兵衛殿武大夫を招きけるに、渡辺大きに悦び望む處なりとて、メ掛八百之丞といふ劍術捕手の手者を草履取と頼み、少しも恐れず、天野が屋敷に至りける。然るに十郎兵衛は渡辺を嫩(なぶり)りて楽しまんと思ふ處に、草履取八百之丞玄闕前に有て種々のたわむれ事をして居合の曲拔、供草履を激と抜打に四ツ切など致し楽みける。

十郎兵衛是を見て肝をひやし、武大夫を色々もてなし終に無難に帰しけるは、偏にメ掛の手わざ恐れし處也。

ぶどふの水筒

然るに武大夫屋敷に帰り、八百之丞をもてなして云やう、ぶどふの水筒は酒の味を出すすと聞ければ、未だ水筒に成るべきぶどふの木を見當らず。汝何方に太きぶどふの木を見る事あらずや、知らせよと語りけるに、其時八百之丞、兼々承る所君も御存知ならんや、下野の笠西に公方様御あがりのぶどふの木は大木なりと聞り、是は御存知に候やと申上ける。武大夫大きに悦び、いや始て聞たり、早速取よせべしとて八百之丞を帰し、直様笠西に打立けるが、夜明、かしこにいたり其所を聞出し、ものをも云ずぶどふの木を脇差を抜て切倒したりければ、番人七、

八人六尺棒を引提て飛来り、狼藉者搦らめ捕れと匄(よばわ)りけるに、武大夫にらみ付て、手向ひなさば切て捨んと大声に匄り、我は盜賊にはあらずと錢三文出し、あたへを遣わすべしと勇々と江戸屋敷を差て帰りけるに、指差者も無かりしは不敵なりける事ども哉。此水筒今に渡辺が家に残りけり。然るに此渡辺人に負る事をきらひ光陰を送りしが、然るに御上がりのおとふの大木狼藉物の為に失へりと届けたり。

男達制罪、武大夫不首尾のこと

其外男達かましき事多く、辻切又は狼藉の類はびこり、後には御政事をも辨へざる事言語道断也とて、中山勘ヶ由に仰付けられ、御制道敷敷(きびしく)召れ捕、御吟味の上御制罪に行ける。

其者どもには唐犬権兵衛・放駒四郎兵衛・大鳥一平・鷲爪金平等委く鈴ヶ森へ引出したり。

此時渡辺武大夫は此者共と兼てひたしくまじわり行心も存たりければ、見物せんと緋朱子の次上下にて衣服を改め、金作りの大小りつばに立、人目を驚かす。大の男、見物の中を押分け近々と寄て見物す。此時流石の男達ども恨めしきと思ひけん、鷲爪金平、役人に向て、あの者も同類に御座候と申ければ、役人差図に依つて同人壱人武大夫の前に来り、御自

分も同類の由あの者申ければ御大儀に候得共、繩に懸り給へと申ければ、渡辺、畏り候、然しながらあの者へ面會の上一言申、相違無ければ、いか様にも御仕置を蒙るべしとて、金平が側に行て武大夫大声に、己此場に於てひきやふ千万不届のやつらと、たむつばを仕懸けたりければ、金平頭を下げて、御免下さるべし、人違ひに御座候と申ければ、武大夫役人に向ひて、あの者申通にて候上は、御不審も候まじと申ければ其通り相濟み、武大夫虎口をのがれ、何れも見物して我屋敷にぞ帰りける。然るに此事忽ち諸家のとり沙汰となつて御屋敷に聞へ、こしゆび悪く終に御国勝手仰付られ、武大夫国元にぞ引移りける。

以上のように、波線の部分など相違あるけれど、ほぼ類似した文章になつているといえよう。ただ、「大秘録」の前書きにあるように、古のことを聞き出して袖日記として留め置いた記録ならば、「見聞志」にあるように小見出しがあつてもよいかとも思われる。

卷一は、つづいて「船頭弥惣右衛門働きの事」「板倉久八棒火矢の事」と言う見出しで書かれているが、このなかにも「古餘綾見聞志」の小見出し「板倉理右衛門棒火矢の事」とに書かれている内容と極似した文章が載っている。(つづく)

明治三十五年九月

# 「小田原大海嘯」と被害状況

平倉 正

はじめに

今年から数えて丁度百十年前、明治三十五（一九〇二）年九月、大激浪を伴う高潮が相模湾西部沿岸地帯を襲い、沿岸の諸町村に、わずかに二時間の間に

死者 六〇人  
 負傷者 三六五人  
 行方不明 一二人  
 家屋全半壊流失 一二二二戸  
 床上・床下浸水 一四八九戸  
 船舶流失 一三四隻  
 船舶損壊 四二三隻

この災害は後に「小田原大海嘯」として記録に残るが、この小田原大海嘯とは、どのようなものであったのか少しく検証してみたい。

## 「海嘯」とは

そもそも「海嘯」とはどのような現象であるのか。「嘯」とは、息を吹きかけるという意味があり、「海嘯」は、高潮時に強風による高波が激しく岸に打ち寄せせる現象で、満月や新月の大潮の時期に台風が重なると大きな被害を起こしやすい。

## 小田原の海嘯

小田原大海嘯に代表される海嘯現象は、突発的であったわけではなく、江戸は元禄の時代から記録があり、明治になってからも、程度の差こそあれ、明治十年、同十三年、二十五年、三十二年にも海嘯にみまわれている。

いまここで注目している明治三十五年九月二十八日の大海嘯は、「図1」に示すように、東は大磯町から西は真鶴町にまでおよび、人的被害はもちろん建物、船舶の被害は「表1」に示すように想定を超えた規模になり、後々「小田原大海嘯」と呼ばれるようになった。

## 海嘯（高潮）の成因

海嘯は、海岸の地形、海底の状況、気象条件などの複数の条件がからみあって高潮、高波が岸に押し寄せる「複合的な現象」である。

### 高潮

毎日生ずる潮の干満が、満月或いは新月の時期には大きくなって「大潮」といわれて高潮のペースとなる。相模湾での干満の差は

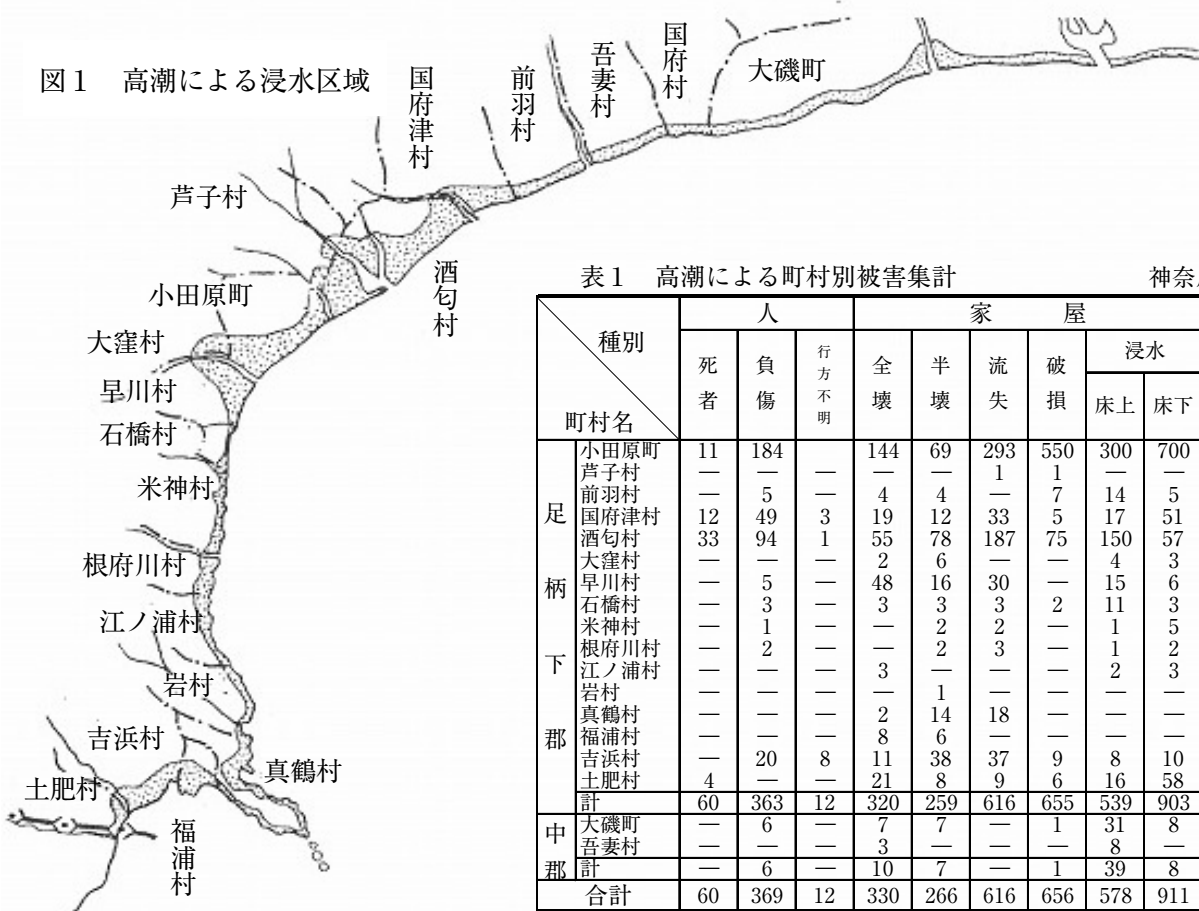


図1 高潮による浸水区域

表1 高潮による町村別被害集計 神奈川県調

種別	人			家屋				浸水		船舶		
	死者	負傷	行方不明	全壊	半壊	流失	破損	床上	床下	流失	破損	
								町村名	流失			破損
足柄下郡	小田原町	11	184	—	144	69	293	550	300	700	2	136
	芦子村	—	5	—	—	4	—	1	7	—	—	—
	前羽村	—	5	—	4	4	—	—	14	5	4	4
	国府津村	12	49	3	19	12	33	5	17	51	35	6
	酒匂村	33	94	1	55	78	187	75	150	57	37	65
	大窪村	—	—	—	2	6	—	—	4	3	—	—
	早川村	—	5	—	48	16	30	—	15	6	8	12
	石橋村	—	3	—	3	3	3	2	11	3	8	3
	米神村	—	1	—	—	2	2	—	1	5	5	5
	根府川村	—	2	—	—	2	3	—	1	2	16	—
	江ノ浦村	—	—	—	3	—	—	—	2	3	18	—
	岩村	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1
	真鶴村	—	—	—	2	14	18	—	—	—	—	120
	吉浜村	—	—	—	8	6	—	—	—	—	—	44
土肥村	—	20	8	11	38	37	9	8	10	—	13	
福浦村	4	—	—	21	8	9	6	16	58	—	4	
計	60	363	12	320	259	616	655	539	903	133	413	
中郡	大磯町	—	6	—	7	7	—	1	31	8	1	10
	吾妻村	—	—	—	3	—	—	—	8	—	—	—
計	—	6	—	10	7	—	1	39	8	1	10	
合計	60	369	12	330	266	616	656	578	911	134	423	



一m強、小田原大海嘯は、陰暦十月十五日で、大潮の時期に当たった。うねり

台風などで強風が水面を走ると、水面は風の方向へ吹き寄せられる。水面は風速や風がかかわった距離に応じて増す。台風の左回りの風は、相模湾上の水面をうねりとなって西部の浜に打ち寄せただろう。

気圧下降による吸い上げ効果  
台風などにより気圧が下降すると、水面が吸い上げられ、水位が上昇する。気圧が一ヘクトパスカル(hPa)あたり下降すると、水位は一〇〇mm上昇する。例えば気圧が九五〇hPaの時には、標準気圧(一気圧=一〇一三hPa)の基準水面から、約六三〇mm上昇することになる。

風の吹き寄せ効果  
風の吹き寄せによる水位の上昇量は、湾の奥に向かう方向の風が強ければ強いほど、また水深が浅ければ浅いほど大きくなるといわれている。  
風波やうねりの効果  
台風の間は変動しながら不規則に波立つ水面に作用して三角波を発生させ、発達した台風などはごく普通に数mの波となり、うねりになって海岸に打ち寄せる。

相模湾沿岸の高潮

相模湾は土佐湾と同じように、外洋に向かつて広く開いており、水深も深いので大きな高潮は起きにくいと思われていたが、災害史には意外にも多くの高潮災害が記録に残されている。

明治三十五年九月の高潮での被害が異常に大きくなった理由としては、高潮自体が大きかったことの外に、二つの事が係わるとされている。その一つは、海岸線の砂浜の幅が狭くなっていたことである。これは元禄十六(一七〇三)年の大地震のあと地盤が沈下したことから、海岸堤防の外側に向かつて開拓が進み人間活動が海に近寄ったことにより生じたと考えられる。もう一つの理由は、明治以降海岸堤防が老朽化していたにもかかわらず、十分な補修工事が行われていなかったことである。

明治三十五年九月の台風

この台風はマリアナ諸島沖で発生したもののようで、進路を北北西にとつて二十八日八丈島東の海上を経て房総半島の南端に上陸し、八時二十分ころから横須賀の西部、横浜の西部をとつて次第に北から北北西に向きを変えて、新潟付近から日本海へでた。図2にその軌跡を示す。前述した「キティ台風」とともに、昭和三四年、夜間に三・八九mもの高潮が押し寄せ、五、〇九八人もの死者を出した「伊勢湾台風」の進路も参考に記してある。

この台風の通過にともなつて観測された横浜の気圧と風の変化を示したのが、表2であるが、横浜では二十八日未明から気圧が急速に下降しはじめ、北東の風が次第に強ま

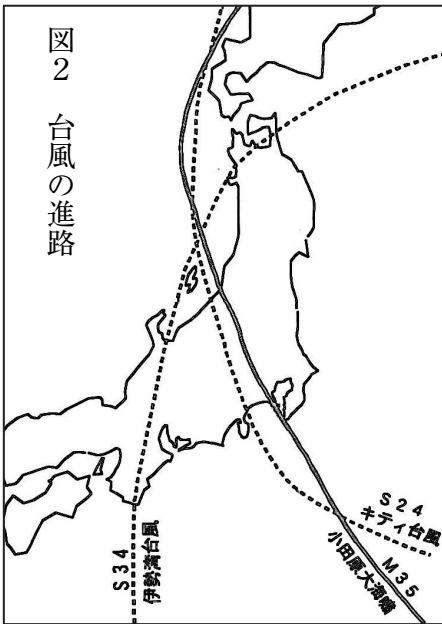
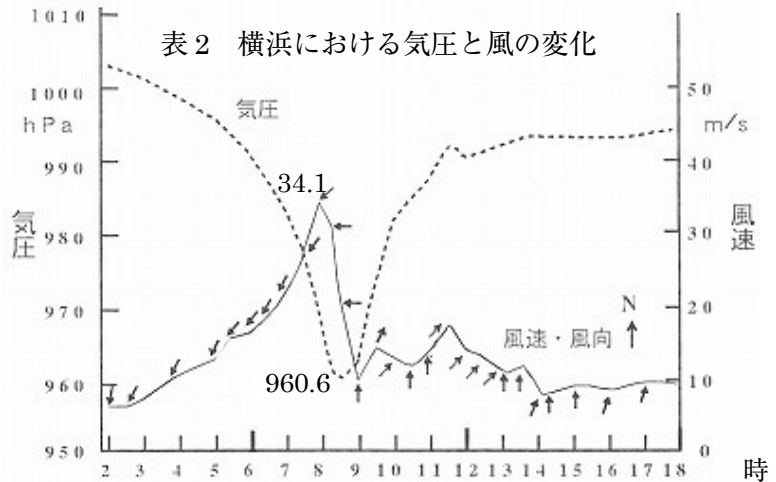


図2 台風の進路

て、八時には北東の風秒速三四・一m、気圧も九六〇・六hPaを観測しており、一五mほどの強風が昼過ぎまで続いている。この台風に伴って雨が降りはじめたが、降雨量は比較的少なかったため、洪水被害は比較的軽微だったが、暴風によって

発生し、発達した高波と高潮による被害は、空前絶後ともいふべきもので、台風が通過して南風にかわつた九時頃から、高波、高潮とも徐々に高まっていき、十時頃からは、急速に湧きあがるように高まった波が海岸を襲い、十一時頃には堤防を越え、国道一号線を越え、海岸から四〇〇mから五〇〇mの範囲まで浸水した。  
その被害区域は、西は福浦村から東は大磯町までに及び、波の高さは国府津が境で、これより南では約二七m以上に及んだ。

表2 横浜における気圧と風の変化



## 各地の被害状況

この時の被災の状況については、神奈川県測候所(現横浜地方気象台)の報告書があるので、その要約を次に示しておく。

もつとも悲惨を極めたのは、酒匂村字小八幡で、道路の損壊は勿論、家屋の倒壊・流失がはなはだ多く、これに次いで国府津、酒匂村字山王原、小田原であった。酒匂村字小八幡

松林は土が洗われたり砂に埋もれたりして、大木が倒れたのもあつたし、倒れそうになっている木も数多かつた。松林を過ぎると、殆どの家屋は倒壊しており、地面は、一帯が砂に埋もれていた。電気鉄道のレールは深く埋もれていて見えない。電柱は傾くか、倒れるかしていた。海岸の堤防から波打ち際まで一五〇m以上もあつたが、高潮はここを越えて堤防を破壊して樹木をなぎ倒し、中には家屋の上に倒れかかっている。堤防に沿った家もちろんのこと、国道を隔てた家々もこのため将棋倒しに倒れ、あるいは破壊された上流失したものもあつて、一望すると、倒れた家々が打ち重なり、まるで魚の鱗が連続している様な状態であつた。逃れる暇もなく倒壊した家屋の間に挟まれて無残な最期をとげた方、逆巻く激浪に、家とともに浚われた方など少なくなく、まさに惨状の極みだつた。

た。

## 酒匂村

酒匂の東部は土堤が高くかつ大きかつたし、多くの松の木がこれを蔽っていた。土地も少しく高くもあつたので、海岸は土堤が洗われ、かなりの家が破壊されたり、松の木の根が洗われて倒れていたが、波は大きな堤防を越えなかつた。西部では電気鉄道の変電所、村役場等が流失してその影をどめてはおらず、酒匂橋付近のレールは水のため数十間にわたつて曲がつており、水勢がいかに激しかったかが分かる。酒匂村字網一色では、土堤が高くかつ大きかつたので、被害は少なかつた。

## 酒匂村山王原

山王原では海岸の大小三重の堤は、おおもね破壊し去られ、家屋倒壊の状況は小八幡とよく似ていた。山王橋は落ち、道路より南手は一面砂原となつて、海岸の製塩会社、その他の家屋は流失していて基礎さえ分らない状態であつた。その上、このあたり一帯は波によつて大量の砂が運ばれてきて、土地は一間以上も高くなつてしまつたようだ。製塩会社の大きなボイラーが、三〇〇m余も流されて、道を越えた田圃の中にあり、漁舟も遙か先の田の中にあるのが見られた。道路の北側の宗福寺には数十人の人が避難していたが、本堂は高潮のために流

失し多くの死傷者をだした。

宗福寺の本堂が流されてゆく様を描いた貴重な記録画が、山王神社に残されている(図3)が、石井福太郎氏は古老の語りも織り込んだ手記を、平成元年の「小田原史談」第一三九号に寄せているので、その要旨を転載しておく。

「この日は、風もなく、ただ時々物凄い驟雨があり、雨が止めば日がさすと云う、変則的な天候だった。しかし打ち上げる大波は往来(国道一号線)から見えたという。俄かに人声が



図3 大海嘯記録画(山王神社)  
「小田原史談第139号」

さわがしくなり突然「逃げる逃げる」の大声があちらこちらから聞こえ、驚愕のあまり飛び出して見ればこはいかに、大山のような大波が水煙を上げて、あそこからあとからと打続き、逆すさまじさ、あつと云う間に逆巻く怒涛は家を潰し、往来に押し出し、或いは流れだす家屋、援けを求める人の声、忽ち阿鼻きようかんの地獄と化した。

記録によると打ち寄せる怒涛の為、宗福寺本堂は(西北二〇〇m)本久寺裏門まで流され、本堂の屋根で助かる者一五名、死する者十有余人とある。(中略)又山王神社に逃げ込みたる者、乞食親子を入れて一二名。この一二名を救助する為、柳下倉吉氏は荒れ狂う怒涛の中に飛び込み板切一枚につかまり中島まで泳ぎ、流れついた船によつて一二名を助けるに至つた。当時神社の横に大きな櫻の木があり、その大きな櫻によじ登つて倉吉夫婦は助かつたと云う。(中略)この外にも神社の松の木に登つて助かつたとかいふ話がつきることなくある(中略)。

又当時の大海嘯の模様を柳下真三氏は次の様に話してくれた。

『私は大海嘯の時はまだ子供だったが、あの恐ろしい事は年

を取るによつて、余計に感じる様になった。自分の家の横通りは浜に行く広い通りだった。あの日、突然大波の水しぶきが何ともいえぬ物凄い勢いでザア―と家にたたき当たった。その異様な音に家族一同生気を失っている瞬間、大波は怒涛の勢いで家の中に飛び込んで来た。あとは夢中で親の背中におんぶされ(山王橋から五〇〇m北東の)弘経寺に避難したが、すでに弘経寺門前で大人の胸たけも水があり、さらに弘経寺から(北北東四〇〇mの)光明寺まで逃げた。あのとときの事を今思い出すごとに身の震える思いがする」と。

避難者は第二、第三と避難先をかえた為、あとになって家族捜しでこれ又大騒ぎしたとか。もしあの大海嘯が夜だったらと思うと身のすくむ思いである(後略)

\* ( ) 内は筆者の注釈

小田原町

小田原町では、海に沿った一帯の家屋は破壊し、中には流失してただ白砂が堆積しているだけのところもあった。ここは他所と違って家屋が多かったため、流失・破壊された家屋が多く、被害は山王原と似たようなものであった。

早川村及びそれより南

早川村も破壊が甚だしく、村役場、駐在所が破壊・流失し、谷も倒壊家屋が少なくなかった。倒壊した家屋が道路を途絶し、白砂の山が出来ていた。早川以南は懸崖絶壁が多く、米神、江の浦等の諸村が懸崖絶壁の間の平地にあるばかりなので、もともと家屋の数が少なかった。更に南では、吉浜は悲惨を極め、その被害は早川と似たようだった。真鶴もまた被害が大きく、多くの船舶が破損し、完全なものは殆ど無かった。岩村は地形の影響でか被害は少なく、網一色と似ている。

酒匂村小八幡より東

小八幡から東では国府津の被害が大きく、破壊・流失した家屋少なからず、停車場の下の海に接した街道の低い所では一抱えもある老松が、幾株となく倒れて路に横たわり、電柱も倒れ尽くしていた。

前川村は家屋に多少の被害、流失あり。中郡の吾妻村では別段被害なし。大磯では堤防が多少崩れ、その顕著なのは、鴨立庵の下から東方八十間ほどの間の堅牢な石垣が、部分的に崩壊していた。酒匂から国府津にかけての田園地帯には潮水が侵入し、一時は一大湖水が出現したようだったという。

築堤への請願と新堤の落成

海嘯の被害が甚大であったことから、酒匂村長は海岸堤防の築造の請願書を神奈川県知事宛てに小田原町長代理片岡永左衛門名で提出した。築堤工事は長期間を要し、取りあえず海嘯で破損した波除土手の修復を明治三六年七月から町内単位で防波堤を築いていき、十字町四丁目から万年町一丁目山王原境までの約二・一五六kmが完成した。

国府津村、酒匂村では、大正二(一九一三)年新設分と増改築分の工事が開始されることとなった。

おわりに

以上みて来たように、海嘯は、一定の条件が満たされると何時でも発生するということが云えそうである。

明治の「小田原大海嘯」の惨状については、今年六月、小田原・足柄歴史六団体合同展示会、また九月下旬には小田原市民会館で故福山金兵衛氏の描いた「小田原大海嘯絵巻」が展示され、参観者の大きな関心を集めた。

「津波」が地震によつて発生する大波であること、その地震の発生を未だ完全に予知することが出来ないという事実と比較して、「海嘯」の発生は近來の予報技術(台風が発生とその進路、風力を含む規模、上陸の可能性など)の



図4 小八幡付近大海嘯の図(福山定男氏蔵) 「図説小田原・足柄の歴史」(下巻)

大幅な進化によつて、ほぼ正確に予測できるし、大潮などの天体現象も正確に予測できるようになった。とすれば、我々は十分に「海嘯」の発生を予測できるわけので、防波堤防の強化はもちろんのこと、それらの広報手段や地域住民であるわれわれの正確な知識と行動が重要であるといえよう。

参考資料

- 図1, 2及び表1, 2 出典…
- 「相模湾の気象・海象」
- 渡部勲・他(一九九七)
- 「小田原地方の気象」
- 磯崎一郎(一九九五)

史料提供…市川 清司

小田原の郷土史再発見

## 老中・大久保忠真の人材抜擢と川路聖謨

石井啓文 ひろ ふみ

文化十四年(一七二七)、京都所司代として天皇の讓位と即位という大礼を恙なく済ませた小田原城主

大久保家九代忠真は、翌文政元年(一八〇〇)急遽参府を命じられ、八月二日、江戸城中において老中加判に列すべき旨を告げられた。同家では忠増以来百十三年振りの老中就任であった。

一旦、京都に戻り再度江戸に向かう十一月十五日、小田原に立ち寄り酒匂河原で七十五名の奇特者等を褒賞したことが、その内の一人二宮金次郎の名と共に『近世小田原史稿本』(昭和六年・小田原有信会編、以下『稿本』と記す)に記され、広く知られている。

その後、老中首座水野忠成(駿河国沼津城主)が他界した天保五年(一八三三)三月、老中松平康任と共に幕府の財政や民政を専管する勝手掛を拝命し、翌六年、松平康任が失脚、五月六日に老中首座についた。(『小田原市史通史編』)

忠真に抜擢された人物

忠真が老中就任後に幕府に抜

擢登用した人物を前記『稿本』は、次のように記している。

「一〇、人材抜擢推舉

侯忠真が抜擢推舉せし人物は吾人の記憶(憶)のみを以てするも能く四五を以て數へつべし、曰く矢部駿州、曰く間宮林藏、曰く川路聖謨(としあきら)、曰く二宮尊徳、云々」

忠真侯が抜擢推舉した人物として、矢部駿河守定謙(さだのり)、間宮林藏・川路聖謨・二宮尊徳の四名を挙げ、忠真の鑑識眼の偉大さを言っている。

この後、この四名についての記述があるが、難解用語が多いため抜擢経緯の要点のみを記す。

侯と矢部定謙

忠真は、水戸烈公と呼ばれた水戸斉昭と親交を結び、側用人で水戸学の大家藤田東湖とも親しかった。その東湖の紹介で当時「徒士頭」であった定謙を知り「先手頭火付盗賊改兼務」を命じたことから、定謙が頭角を表した、という。

侯と川路聖謨

天保の初年、但馬国出石藩兵庫県出石町)の仙石騷動と言われる疑獄事件で、聖謨は脇坂中務大輔と共に、これを明快果断に裁決したことが幕閣に認められた。

この時、老中首座であった忠真が、將軍に登用を推奨し、勘定吟味役を拝命した、という。

侯と間宮林藏

間宮は、「幕府の御普請役なる勘定奉行並吟味役の属僚にして、表面の職務は河川の堤防其他土木工事を監督する任務にて、時には上官の命に依り各地を跋涉し、頗る海外の事情に通するが、中にも蝦夷・満州(中国)については精察を極めたと云ふ」。当時、幕閣では海外事情を審かにする必要があり、忠真は前述の川路聖謨を通して間宮を知り抜擢した、という。

侯と二宮尊徳

「侯が如何にして尊徳を知るに至りしか、恨むらくは一として史の徴すべきものなし。或は思ふ五年にして侯の重臣服部十郎兵衛の家政を恢復したるを洩れ聞きたるに」と推察し、文政の初年、尊徳は侯の招きを固辞すること三年、漸く黙視することも出来ず応じたのが文政六年(一八三三)、侯は四十三歳、尊徳は三十七歳、と尊徳の高弟富田高慶の『報徳記』を

引用している。この後、「家臣中より登用された俊英の士も又決して少なくはなかつたろう。一例として中垣謙齋」を挙げている。

中垣謙齋の抜擢について

「當時、集成館助教(年手宛金一兩)であった中垣秀賢(高百石、後名秀實)を抜擢し、世嗣忠修の御附役とし、以て君徳涵養の輔導に任じたのは文政七年(一八二四)であった(時に忠真幕閣老中齡四十四、世嗣忠修從五位安藝守齡十五、秀實齡二十)。

ところが、不幸忠修は天保二年(一八三一)十一月九日、享年二十二歳で父忠真に先立ちて病歿した。その後、御側目付・取次頭等を兼帯し、御幼君忠貞嫡孫傳吉郎、後名忠愨御輔導役勤仕中、天保八年三月忠真が卒去せられた。

弘化二年(一八四一)故あつて御役御免、遠慮處分を受け小田原に移住した。爾來約十箇年間無役で専ら後進の輩に教授し、安政二年より御先筒頭・御關所監督・大目付役等を歴任し、明治戊辰の事變に際會した」として、戊辰戦役で小田原藩を救ったと伝えられる活躍を記している。

さらに「忠真…古賀洞庵…大鹽平八郎」と題した記述がある。

大塩平八郎の江戸召命

忠真は、大坂の元与力大塩平八郎も江戸に呼ぼうとしていた。

『稿本』は石崎東国・著『大塩平八郎伝』(大正九年・刊)の天保六年(八三)条を引用している。

「是年春正月小田原侯忠真幕閣に首班し、將に新政を行はんとして人才を取る、先生(大塩)を召して政治を問はんとするの議あり。是より先き儒者古賀小太郎(精里)をして先生の対策を徴せしむ。先生即ち真知聖道實踐の一篇を草し古賀小太郎に致す」と記し、忠真は元大坂城代であり、他にも幕府中枢には元大坂町奉行で大塩をよく知る新見正路がいることを挙げ、大塩の召命は確定的である、としている。

さらに、天保六年正月の武藤休右衛門(新見正路家臣)の賀年書簡を基にした論文を引用し、「其俣沙汰止みとなれるは先生の為に国家の為に痛嘆すべし」と召命の中止を惜しみながら、徳富蘇峰・著『近世日本国民史』(昭和三年・刊)の「彼(大塩)は実に此の如く伯樂忠真の一顧を待っていた。併しそれは空ら待みであった。幕府は決して眇たる一与力の隠居たる彼を相手としなかつた」とする説も引用している。

大塩は旗本ではなく大坂町奉行に雇用された与力で、御家人であった。しかも、この時すでに家督を養子格之助に譲り、余生は私塾の門弟指導を楽しみにする隠居の身であった。

蘇峰は、「天保六年、彼(大塩)歳四十三、當時老中の首席小田原城主大久保加賀守忠真、大鹽を召して政治を問はんとするの意あり」と石崎説を肯定し、最後に「果して然らば彼は何故に事(大塩)の乱を起した乎。彼を左も能く知りたる矢部駿河守は、是れ決して久しく巧みたる謀反ではない。只其の意見の行はれざるを見て、憤激の餘此に出でたるものと云ふ、即ち大塩の癩癩玉が爆裂したと云うてゐる」と記し、江戸召命の中止に対する不満が爆発した、という。

以上が、『稿本』に記された忠真の人材抜擢の要約であるが、同書編者の推察でもある。なお、大塩の召命には後日談があり若干触れておきたい。

関西学院大学リポジトリ・井戸田史子氏論文によると、天保八年(一八三)二月十九日に「乱」は起こるが、大塩は前日の十八日に大久保忠真(老中首座)・徳川斉昭(水戸藩主)・林述斎(大学頭宛)に、『建議書』を送付したが、伊豆国塚原新田地内一里塚付近(現三島市)で盗難に遭い紛失する。その結果、葦山代官江川英龍に回収され、英龍は内容の重大さにこれを書写して届け出た。その写しが江川文庫から二十八年前に発見された、という。内容は、大坂町奉行所の不正告発と、幕府老中や大名による不正無尽の告発状である。

前者は内藤矩佳・久世廣正・矢部定謙のいずれも大坂町奉行時代の不正。後者は大久保忠真・松平乗寛・松平宗発・水野忠邦・大久保教孝のいずれも不正無尽の告発である。大塩の抜擢を考えた忠真と、大塩と親交があったと伝えられる矢部定謙の名があることに驚かされる。

内容の詳細を記す余裕はないが、前者の不正は幕府役職者に対する大塩の個人的な批判、後者の無尽は、大久保教孝(萩野山中藩主)の告発状を詳細に検討して「不法な無尽であるかは取り調べて見ないことにはわからない」「いづれも大塩の個人的な批判で、彼等が幕府の重職にいることに対する大塩の怒りであろう」という。

当時、事件の顛末を詳細に記した松浦静山(平戸藩主)は、建議書を含めて「殆どト兎戯ニモ比スベシ」と、記している。(『未刊甲子夜話』)

大久保忠真前後の幕閣主席(老中首座または大老)と出来事

水野忠成(沼津城主)	文化14年(1817)8.23~天保5年(1834)2.26
○異国船打払令(文政8年) ◆シーボルト事件(文政11年)	
大久保忠真(小田原城主)	天保6年(1834)5.6~天保8年(1837)3.19
◆モリソン号事件(天保8年)	
水野忠邦(浜松城主)	天保10年(1839)12.2~天保14年(1843)閏9.13
●蛮社の獄(天保10年5月) ○異国船薪水給与令(天保13年)	
土井利位(古河城主)	天保14年(1843)閏9.13~天保15年(1844)6.21
水野忠邦(浜松城主)	弘化元年(1844)6.21~弘化2年(1845)2.22
阿部正弘(福山城主)	弘化2年(1845)2.22~安政2年(1855)10.9
○日米和親条約調印(嘉永7年) ○日露和親条約調印(安政元年)	
堀田正隆(佐倉城主)	安政2年(1855)10.9~安政5年(1858)6.23
○朝廷に修好条約勅許請願(安政5年3月)	
井伊直弼(彦根城主)	安政5年(1858)4.23~安政7年(1860)3.3
○日米・日露修好通商条約調印(安政5年) ●安政の大獄(5~6年)	

では本論に戻り、諸文献から彼等が忠真の抜擢後、どのような活躍をし、実績を残したかを調べてみた。ただ、尊徳は忠真との関係を示す確かな史料が見られず、『稿本』、実績については諸書に記されていることから又の機会に述べたい。先ずは、忠真他界前後の老中首席(首座または大老)と社会情勢を表にまとめた。

## 老中・忠真前後の社会情勢

老中首座水野忠成の化政期は、日本近海で異国船が捕鯨のため出没するようになり、文政八年、異国船打払令を發布、十一年にはシーボルト事件も起こる。

忠成他界後の天保六年、忠真は老中首座に就くが僅か三年で病に倒れた。後継の水野忠邦は、天保の改革を称するが「蛮社の獄」も断行する。

しかし、忠邦に同調した土井利位や鳥居耀藏は、上知令あげられいには反旗を翻し水野は辞任。その後、阿部正弘・堀田正睦は開国に向けて外交に腐心するが、突然井伊直弼が大老に就任して「安政の大獄」を惹起した。

こうした、尊皇攘夷の狭間で忠真が抜擢した三人は、どのように活躍したのだろうか。それぞれの事績を『国史大辞典』を中心に検証してみた。

## 矢部駿河守定謙

寛政元年(七五)生まれ。文政六年(八三)御小姓組から小十人頭、同十一年、先手鉄砲頭。同年、火付盗賊改兼帯とあるから、この時忠真が抜擢したのであろう。天保二年(二二)堺町奉行、同四年、大坂西町奉行になり元与力・大塩平八郎と親交を結び(再検討が言われている)、天保の飢饉にはその意見を入れて窮民の救済にあたり名

奉行とうたわれた。

天保七年(二二)勘定奉行、同十二年、江戸南町奉行になるが、水野忠邦の天保改革に北町奉行遠山景元と共同して対抗、三方領地替では地元民の意見を入れ、断念させた(没後、出羽庄内藩復領の恩人として祭神として祀られる)という。

こうして水野忠邦と対立したため、町奉行の座を狙う目付鳥居耀藏の策謀もあり罷免され、天保十三年、伊勢桑名藩預り、抗議のため自ら絶食して死去、五十四歳。没後、定謙の見識の正しさが証明され、川路聖謨ら幕末期の官僚からは非業の死を惜しまれた。その後、改革の失敗と不正発覚により水野は辞任するが、土井利位の後に首座に復帰、南町奉行に就任していた鳥居は、今度は水野の手で失脚。定謙の養子鶴松が幕府出世を認められ、矢部家は再興された、とある。

## 間宮林藏

安永四年(七五)常陸国筑波郡上平柳村(現・つくばみらい市)の農民兼笹(たが)職人間宮庄兵衛・クマの嫡子。幼少の時より数学的才能に秀で、その才が利根川の岡堰工事に従事していた幕吏に認められて寛政二年(七九)頃、幕府の下役人に採用された。

同十一年(八五)蝦夷島に渡り、翌十二年蝦夷地御用雇となり、箱

館で伊能忠敬に会い師弟の約を結び測量術を学ぶ。享和三年(一〇)西蝦夷地を測量した。

文化四年(一〇)択捉島シヤナ在勤中、ロシア人の同島襲撃に遭遇し会所を放棄して箱館に帰り、幕府(江戸)に召喚されたが御雇同心格となり蝦夷島に戻る。

文化六年、樺太が島であることを確認、「デレン」という町の存在、ロシア帝国の動向などを探り、後に名付けられた間宮海峡を発見した。こうした報告に江戸へ来た際、忠真に出会ったという(吉村昭・著「間宮林藏」)。

文政五年(一三)勘定奉行属普請役、同七年には幕府の隠密として異国船渡来の風聞内探のため東北の海岸を往返、同十一年勘定奉行村垣定行の部下になり、全国各地を調査する。

この年のシーボルト事件では、林藏が密告者とも言われたが、事実は天文方奉行高橋景保から、シーボルトからの礼状が林藏に届けられ、それを規定通り幕府に届けたところ、景保とシーボルトの間わりが明らかになり事件に発展したものである。

その後、石見国浜田藩の密輸事件摘発では、林藏が大坂西町奉行矢部定謙に報告し、矢部の手配で首謀者が逮捕された。薩摩藩の密貿易探索もしている。

天保十五年(一四)二月二十六日

他界。聖謨は林藏の死後、日記で

「我に奇を好むの癖あり、奇人を好む也。林藏・渡辺崋山の類也」と、奇人≠非凡な人、と高く評価し、林藏が先見の明があったことを称え「間宮林藏がいひしことなど実に思ひあたるなり。(中略)林藏の非凡なることは、予も夙に之を知りたり」と、追憶している。

なお、林藏は豊臣秀吉の小田原合戦で、山中城の守将で戦死した間宮康俊の五男元重の子孫、と伝えられている。

## 川路左衛門尉聖謨

享和元年(一〇)豊後国(大分県)日田に生まれ、文化九年(一三)十二歳で小普請組の川路三左衛門光房の養子となる。翌年元服して小普請組から、支配勘定出役・評定所留役を経て文政十年(一七)寺社奉行吟味調役となり、天保六年(一五)但馬国出石藩仙石家の内紛の断獄にあたり、奉行脇坂安董を扶けて能吏として名を挙げ、忠真によって勘定吟味役に推挙される。

この事件では勝手掛を忠真と共に担当した松平康任が失脚し、結果、忠真が首座についた。

この時のことを聖謨は随筆に、「御勘定吟味役へ轉するなど、内願せしことなきは不及申、(中略)布衣の侍幕府にて布衣といふは、諸大夫に次ぐ位階の名なり)に加へられんと奉行の衆より申立あらむ

といはれしか、是すら望外の至りと驚嘆せしことなり。(中略)友鷲一件(仙石騒動のこと)は、いづれも中務大輔と某して事を成せしよしの風説専ら行はれ、衆人某を彼是(あれこれ)と申居候折柄、布衣の御沙汰は、堅く辭せんと思ひ込しに圖らざるも、例になき昇進たる御勘定組頭格・寺社奉行附調役(當時、聖謨の位置なり)より、御勘定吟味役に轉するなど、夢にも心附候義に候はず。依て御辭退之義を奉行衆迄申立しか、上より厚き御選舉とのことに候へは、此上辭し可申様も無之、御受申上候ことに至りぬ」とある。

忠真は矢部定謙を藤田東湖の紹介で知った(稿本)とあったが、聖謨も東湖と親しかったことを東湖が随筆に記している。「癸巳の歳(天保四年)余、始めて、これ聖謨を云を舟河原橋の宅に訪ひ一見如故、其人物の凡ならざるを知れり。此頃、聖謨の名、稍々世に顯はれたれば、幕府中屈指の輩を始として、諸藩の達士も聖謨を訪ひしもの少からじ。

又聖謨も天下の英俊に交を求めしこと想ふに餘あり。當時、其親交の名士を畧舉せば江川英龍(通稱太郎左衛門、伊豆葎山の代官)・岡本成(通稱忠次郎、後に近江守)・矢部定謙(左近將監、又駿河守)・羽倉用九(通稱外記、號は蓬翁)・渡邊登(三州田原の人、華山と號す)・永山十兵衛(肥前佐賀)・澤村宮門(肥後熊本)等の諸氏なり。(中略)また、間宮林藏といへる奇士ありけるが、氏は夙に北地を跋渉し、此ころ蝦夷の事情を熟知するもの、恐らく氏に如くはなし。聖謨偶々氏を見て其人物の異常なるを識り、延ひて以て幕僚となし深く之を親愛せり。氏も亦甚だ聖謨に服し、其の北地形勢を論し滿州邊との關係を語りしこと、殆んど毎日に及びけると聞く」と、ある。

また横井小南(熊本藩儒学者)も自著『遊学雜志』に記している「八月十九日(天保十年、川路三左衛門殿を訪ふ。此人、其名を聞くこと久し、果して非常の英物なり。當時御勘定吟味役にて甚繁用也。朝五半(九時)より登城、歸は七ツ半(五時)或は暮に及び、且朝夕諸役人應對、書附の調へ、休まれるは必九鼓(十二時)に及よし噂なり(後略)」と記している。さらに林述斎(天学頭や橋本左内(越前国福井藩)との交友も知れる。

そして、忠真他界後、水野忠邦が首座となり、洋学を極度に嫌う鳥居耀蔵が重んじられ、聖謨も執拗に狙われるが、忠邦に宛てた建議書が信任され「蛮社の獄」には事なきを得た。

天保十一年(一八四〇)佐渡奉行、翌十二年小普請奉行、同十四年普請奉行として天保改革に参与。忠邦が失脚すると弘化三年(一八四二)奈良

奉行。左遷とも言われるが、この時、判明していなかった神武天皇陵の搜索を行い、『神武御陵考』を著し朝廷に報告している。後に孝明天皇が、これを元に神武天皇陵の所在地を確定された、という。嘉永四年(一八五二)大坂東町奉行、翌五年、勘定奉行に昇進し海防掛を兼ねた。翌六年、プチャーチンの来航によりロシア使節応接掛を命ぜられ長崎で談判、翌安政元年(一八五〇)十一月以降、下田で交渉し大目付筒井政憲と共に日露和親条約に調印した。

翌二年禁裏造営掛、同三年外国貿易取調掛、同四年ハリス上府用掛、同五年正月、老中首座堀田正睦が通商条約(開国)の勅許奏請のため上京する際、目付岩瀬忠震と共に随行を命ぜられた。かつて奈良奉行時代に青蓮院宮に知遇を得、禁裏造営掛として公卿間にも知己が多く、運動したが勅許はならなかった。

同年(一八五二)五月、政治問題になつていた將軍繼嗣では一橋慶喜を擁立する考えがあつたため、大老に就任した井伊直弼に疎まれ西丸御留守居役の閑職に左遷、翌六年、さらに免職・隠居・差控に処せられ、家督は嫡孫太郎(寛堂)が継いだ。

この時『藩翰譜』(新井白石・著)を読み、大久保忠隣が無実の罪で家康に失脚させられたことを知

り、忠隣を「武士の鑑」と評し、自らが罪科には問われなかったことを可とすべき、と記している。(『川路聖謨之生涯』)

そして、井伊が安政七年(一八五六)「桜田門外の変」で倒れると、文久三年(一八五三)五月、外国奉行に復帰。しかし、職を辞して五年余、年齢も六十三歳を数え、十月、老疾をもって辞した。

以後、官途に就かず、慶応二年(一八五六)中風を発し身体を自由を失うが、読書に親しみ、徳川家の厚恩を思い奉公の念は忘れなかつた。同四年三月十五日の朝、東征軍が迫り江戸開城が目前にあるを察し、表六番町(現・千代田区六番町)の自宅で「天津神(あまつかみ)に背くもよかり蕨つみ飢にし人の昔思へは 徳川家譜代之陪臣 頑民齋川路聖謨」の辞世を残し割腹の後、ピストルをもって果てた(中風を患っていたためと言われる)。まさに幕府に殉じたのであろう。享年六十八歳。

散りゆく花を惜しむ

川路聖謨は、手紙はもとより日記・随筆等種々書き残している。忠真が病に倒れた時、再三見舞い、平癒を願っていた心情が切々と伝わってくる。

『遊藝園隨筆』は、「天保七年後半頃から忠真は床に伏せり勝ちであつた」とし、十月十七日安

国殿(家康廟所)に病氣平癒の祈願を捧げ、「大久保加賀守殿、近頃、口中痛にて稍々快方の由に候處、此頃又々不宣よし。加州(忠真)は精忠私心のない純粹の忠義、純忠の執政(老中)にて長く老中の職にあらんには、社稷(国家、朝廷)の大幸に可有之歟。文政以來十有餘年の内に、綱紀大に破れ候處、加賀守殿、深く國家のことを憂ひ晨夜(朝から夜まで)の勞を積れ候に依て、國脈の長短に拘らんこと必定なるへし。(中略)方今、天下太平とは乍申、加州、若今死したまは、(中略)余これに代りて死すること叶は、國家の大幸と云へきなり」と、いう。

口中痛は、舌癩か喉頭痛と言われている。この十余年、綱紀が乱れたが忠真の努力によって元に戻ろうとしている。忠真が病死すれば「國脈の長短」に関わるとして、忠真に代って自らを死にいたらせ給い、と願う。

「翌八年二月廿九日、加賀守殿江参る。大坂のこと(天塩の乱)容易に入御聴候は、御病氣に障り不可然旨申上候處、彼地藏屋敷の家来より注進の旨もありて、御聴に達せしよし承る」

願ひも空しく三月九日、忠真は帰らぬ人となった。幕府の公称は三月十九日夜とされ、翌二十一日、聖謨は藩邸に弔問に訪れ、帰りがけに和歌を詠んでいる。

世の中の心をしらは天津主  
散りゆく花をしはしと、めよ

また『稿本』は、間宮林藏は兼てより忠真の爲に信任せられしが、其訃音を聞き藤田東湖に語りて曰く、「噫小田原侯逝く、吾輩又力を致すべきなし。伯樂一たひ去りて驥馬空しく槽檻の間に老ふ、林藏の落膽知るべき也」、さらに「當時刑辟に觸れて、江都傳馬町の牢獄に呻吟したりし罪囚すらも尚其逝去を惜めり、吾人は其狂歌なるの故を以て之を抹殺する能はず。曰く、

提燈(小田原)がふつと消へたて

娑婆が闇

侯は斯の如く上下貴賤の隔なく、萬衆の哀惜を負ふて白玉樓中の人となれり云々」とある。

#### 後記(北方領土問題の原点)

以上、尊徳は別にして忠真に抜擢された三名は、チームとは言わないまでも相互に信頼関係で結ばれ、情報交換していた。

特に聖謨がロシアとの条約交渉で、林藏の「択捉島や樺太島にアイヌ等原住民の他、ロシア人の姿は見なかった」という報告が、我が国領土を主張する根底にあったと推定できる。つまり、忠真が抜擢した人材によって日露国境策定が決定づけられた、と言っても過言ではない。

本稿では触れなかったが、日米

交渉に当たったのが聖謨の実弟で下田奉行の井上清直と、小田原藩家老岩瀬大江進と同じ三河を出自とする岩瀬忠震である。

ハリスは後年、「当時、井上・岩瀬の諸全権は綿密に逐条の是非を探索して余(ハリス)を閉口せしめることありき、(中略)懸かる全権を得たりしは、日本の幸福なりき、彼の全権等は日本の為に偉功ある人々なりき」と言わしめているが、日米はお互いが力を鼓舞し合うぎりぎりの交渉であった、と推定できよう。

対して、聖謨についてゴンチャロフが著書『日本渡航記』(井上満訳・岩波文庫)で言っている。

「この川路を私達は皆好いてゐた。川路は非常に聡明であった。彼は私達自身に反駁する巧妙な論法をもつて、その知力を示すのであったが、それでもその人を尊敬しない訳にはいかなかった。その一語一語が、眼差の一つ一つが、そして身振りまでが、すべて常識とウィットと、焔敏と、練達を示してゐた。明知はどこへ行つても同じである。民族・服装・言語・宗教が違い、人生観までも違つてゐても、聡明な人々の間には共通の特徴がある。馬鹿には馬鹿の特徵があるのと同じである」とある。ロシア使節は聖謨の人間性を絶賛している。

聖謨も、長崎で初めてロシア使

節の晩餐に招かれたとき、

「異国人、妻のことを云えば泣いて喜ぶという故に左衛門尉(聖謨)妻は江戸にて一、二を争う美人也。夫(それ)を置きて来りたる故か、おりく思い出し候。忘るる法はあるまじきやと云いたるに、(ロシア人)大に喜び笑いて使節も遠く来り、久しく妻に逢わざること、左衛門尉が如きにあらず、左衛門尉の心を以て考えくれ候え、と申したり」と、『長崎日記』に自記している。こうしたユーモアと機知に富んだ会話が、信頼関係の上での日露交渉を推定させる。

その後、井上・岩瀬をはじめ交渉者の多くが井伊大老により閑職へ左遷・謹慎等を命じられ、岩瀬は失意の内に病死している。

井伊は勅許なしの締結を認めながら、締結者罷免の真意は奈辺にあつたのか。「安政五年十二月、井伊大老の旨を承け間部(詮勝)・酒井(忠義)の奏上せし所は、鎖国の舊制に復せんとのことを以てせしは明らかなり」(『川路聖謨之生涯』)には、驚かされる。

維新後は、攘夷を標榜した薩長等によって多くの歴史が語られ、条約締結に腐心した幕臣たちが陽の目を見ることは極めて少ないことが何とも惜しまれる。

なお、川崎三郎紫山は自著で、矢部定謙・岩瀬忠震・川路聖謨を「幕末三俊」と言っている。



史談雑記帳

瓜生外吉海軍大将の胸像

南町の山角(やまかく)天神社の一角に、日本帝国海軍提督、瓜生外吉海軍大将の石像がひっそりと建っている。

瓜生は明治四十五(一九二二)年に小田原に別荘を建て、昭和十二(一九三七)年に亡くなるまで住んだ縁からこの神社に胸像が建てられたのだが、最初からここにあった訳ではない。

瓜生の没後の昭和十四年、大将の胸像が東京の旧瓜生邸に残されていることを知った有志が、名将の記念を永遠に保存するため下げ渡しをうけ、別邸に近い天神社境内の石段の中途に設置することとなった。設置には小田原「青年誠友会」が中心となり、各方面の援助を受けて、昭和十四年の海軍記念日を期して除幕式が行われたものである。

瓜生外吉は安政四(一八五七)年一月、加賀藩の支藩大聖寺藩士・瓜生吟弥の二男として生をうけ、明治五(一八七二)年、海軍兵学校に入



日露戦後、佐世保、横須賀の鎮守府長官などを経て男爵を授けられ、大正元年海軍大将昇進し、昭和二年に退役する。

校、明治八年に米国留学。同十四年に米アナポリス海軍兵学校を卒業、海軍中尉に任官。参謀本部課長、砲艦「赤城」艦長などを経て、明治二十四年、海軍大佐・横須賀鎮守府海兵団長に就任。フランス公使館附武官などをへて『扶桑』『松島』『八島』艦長を経て明治三十三(一九〇〇)年海軍少将、第四戦隊司令官として日露戦争を迎え、緒戦の「仁川沖海戦」で勝利する。

この「仁川沖海戦」時の瓜生提督の挿話を司馬遼太郎は「坂の上の雲」で書いている。

「瓜生はみずから英文をもつてロシア軍艦ワリヤークの艦長ルードネフ大佐に対し挑戦状をかいた。(すでに日露両国は交戦状態にある。余は貴官に対し貴下の兵力をひきいて九日正午までに仁川港外に退去されんことを要請する)。(後略)

結局ロシア艦隊は日本軍の砲撃に堪えず、港内で自沈するが、この海戦は、規模は小さいながら日本人がヨーロッパ人との間で交わした最初の海戦で、日本側には一人の死傷者もなく、日本に大きな自信をあたえた。

瓜生は益田孝の勧めで大正二(一九一三)年、現在南町の「瓜生坂」と呼ばれる坂の上に別邸を構える。この「瓜生坂」も、足が不自由となった瓜生に気遣った益田の援助を得て、海軍関係者が坂を舗装したものと伝えられる。瓜生の妻繁子は益田孝の妹。明治四(一八七二)年、十歳の時、津田梅子、山川捨松らと岩倉使節団に従ってアメリカに渡り、ワシントンで音楽を学んだ才媛で、同十四年帰国、文部省音楽取調掛教授となり、同十五年当時海軍大尉の瓜生外吉と結婚する。結婚後もピアノ教師として多くの弟子を育成、音楽教育に重きをなし、従五位にも叙せられるが、明治三十六年以降は家庭人に専心、瓜生発病後は看護を尽くしたが、瓜生の死に先立つ昭和三年永眠。

瓜生はまた、在米時代からキリスト教の洗礼を受け、小田原在住後も時々、当時の聖公会の牧師宮沢九萬象師と宗教について意見交換しており、病床においてもしばしば同師を招いて祈祷を依頼されていた、という。

現役時代から頭脳明晰にして博識、沈着にして熟慮断行の人といわれながらも、礼儀に厚く、発病以来、小田原町民は全快を祈念したが甲斐もなく昭和十二年十一月、帰らぬ人となる。

なお、この石像を彫刻したのは

長野市生れの彫刻家北村四海で、「海軍大将瓜生外吉」「大正六年四海」と刻されている。(平倉 正記)

参考資料

「瓜生海軍大将を偲びて」

青年誠友会 編

昭和十四年五月発行

「信濃毎日新聞」

平成二十四年一月六日

会員の方へお願い

—新規会員募集—

小田原史談会では常時新規会員を募集しております。郷土の歴史に興味をお持ちの方に是非会員になっていただくよう、お誘い下さい。申し込みは史談会役員または左記へ連絡願います。会費は年額三千元です。

小田原市堀之内三一―五 植田士郎

TEL〇四六五―三七七―七八八

「小田原史談」原稿募集

次号第三三二号(平成二十五年一月発行)の原稿を募集します。締切は十一月二十日です。論考・紀行・証言などをお寄せ下さい。お待ちしております。

お問い合わせは左記へ。

小田原市南町四一―二四

松島俊樹

TEL〇四六五―二三一―八六三五

小田原藩 浅田 兄弟 の 敵討

『孝貞義鑑』散策(14)

鈴木 好

三、万助 水戸に定住

何か月か経って惣蔵がきて、浅田兄弟が仇討に出立したから何処かに隠れるという。万助は、「互に別れおし固執ふかけれど是非もなき仕合なり」と、おゆくと別れて手紙を持って川越にゆき、たばこやで賃粉切りをする。

それから万助は名を九兵衛と変え、水戸に移り、磯浜村祝町に住んだ。

水戸での万助の評判は極めて宜しい。派手なことはしたくもできないから、結果的に金がたまり世間の評判もよくなる。その上、武術の心得があるから、頼まれて若者たちに稽古をつけてやるだけでなく、彼らの相談にのり親身になって教導したので、近所の人たちに信用されて、女房の世話をしてもらった。

『常陸国中湊祝町敵討一件』にはこう書いてある。

三年以前水戸領中湊江参り膏葉、按摩杯致渡世居候所至極実躰二相見候故：

『兄弟敵討一件書』には、

当四月二十七日岩井町と申所二而煙草商売致シ女房をもち村方の者二一刀流劍術并柔術等教へ候而相応二被用居候：

とある。

『浅田兄弟』では万助は遊びもしたし悪事もした人物だから、水戸でも遊所に入りし、遊女とも親しんでいて、手紙の代筆も頼まれている。ただ只助を殺したことへの悔恨から、願入寺の鐘を朝夕撞き境内の掃除もしたので、近所の人たちから尊敬されたという。

金子出し合ひ店のつくろいまで立て貝たばこ道具元手金まで世話し

て店を開かせて貰ったのである。暖簾に万屋と書きへの印も付けた。隣人たちの万助への期待の大きさが窺われる。そして嫁の里んが来てから店は益々繁盛した。

「立て貝」は「たてかへ」のこと。『孝貞義鑑』の筆者は、「い」と「へ」が混乱していて「敵討と八よもやおもへしに」「兩人の

子にむかへ」など十個程見つかる。また、「き」とすべきところに「く」を使う。「あるべく所」「申上あぐべく由にて」など五、六個ある。原作者である講釈師か筆記者の癖であろう。

里んは久慈郡児嶋村の弥兵衛の娘。久慈郡は水戸と日立のあいだの、原子力発電所のあるあたり。嫁入り先とうまく行かず、実家に帰っていた。里んが、嫁ぎ先から離縁して万助の妻になるに際して、里んの親は、

縁切片付さへ致さば其元御世話の事殊に姑もなき夫婦ぐらし望む所遣わすべし  
と言っている所を見ると、姑は昔も敬遠されたものらしい。

『仇討細書』の里んの口書によると、

当四ヶ年以前巳年二月中湊村二店かり当時は右村二不罷在候得共ふるい師善兵衛と申者話ヲ以て九兵衛義も同村町水主(かこ)磯右衛門と申もの店かり罷在候由縁付とあり、話に食い違いがあるが、とにかく万助は嫁を貰った。

水主 『広辞苑』で「かこ」を引くと水夫だけ。船を操るもの。船子。船頭。すいふ。とある。『古語辞典』(岩波)では、水手。水主。楫子。「カ」はかぢ(楫)

の古形。船をこぐ人。水夫。とあり、「和名抄」の加古を挙げている。

『大辞林』は、水夫。水手。「か」は梶、「こ」は人の意。船を操る人。古くは広く船乗り全般を指したが、江戸時代には下級船員をいっただ。とある。

『日本国語大辞典』は、水手。加子。水夫。で水主を挙げないが、例文中には

「船頭水主」とあり、かは梶、こ は人の意。船を操る人。楫取り。船乗り。船頭。①として、日本書紀の「鹿子」の例、正倉院文書の「水手」の例、万葉集から「加古」の例を挙げる。江戸時代、

前号までの章 (太字は今号掲載)

序章

第一章 時代背景

第二章 事件発生

第三章 敵討出発まで

第四章 諸国を巡る

第五章 江戸へ帰る

第六章 万助水戸へ(途中まで)

今号

第六章 万助水戸へ(途中から)

第七章 浅田兄弟水戸へ

次号以降

第八章 本懐を遂げる

第九章 小田原へ帰る

第十章 浅田家の系譜

船頭以外の船員、または船頭、楫取り、知工(ちく)、親仁(おやし)など幹部を除く一般船員のこと。櫓權を漕ぎ、帆をあやつり、碇、伝馬、荷物の上げ下ろしなどする。語源として楫子、櫓子、更に「応神天皇が淡路島で狩りをしていた時、鹿の皮の衣を着た人達が船を漕いで来たのを見て、彼らをカコ(鹿子)といったことから。」『古文書解読字典』(柏書房)では、「かこ」と読むのは水夫一例、水主四例で、「御法度之趣舟頭水主二茂申附:」をみると、水主が下級船員の意とわかる。

小田原では、安齊小路の海寄りに「水主屋敷」跡がある。

里んの口書は余り筋道がハッキリしないので、結婚以後の記述を整理してみる。

四年前、というと文政三年、その二月に湊村で結婚。

万助が大病して回復の見込みがないので、後々面倒なことにならぬよう、書物はすべて焼却し、脇差は売ってしまった。ところが病が快方に向かった。売り払った脇差について万助は非常に残念がり、酒を呑む度にくやしがあった。最近になって小脇差を求めた。

ある日、湯治に行き、香具師仲間と喧嘩して相手を殺してしま

った。文政七年四月に祝町に引越

してきた。

弓を射るのが好きで、折々弓を射ていた。

万助は香具師渡世していた、と里んは言っている。香具師は諸国を巡歴する商売だから、どこに行っても身許や素性を詮索されない。たばこは香具師の売品の一つで、香具師でなければたばこを売る事はできない。おそらく病氣療養の気持ちもあつて湯治に行き、香具師仲間を殺し、「自ら殺害可被処も不相知身の上二候得共」と里んは述懐する。

万助が脇差にこだわったのは、仇討を意識していて、脇差で身を守るつもりであつたからであろう。『鬪撃実録』にはこう書いてある。

万助と里んは、たまたま願入寺の寺領内にいたが、二人があまりに親しみ過ぎるので寺領を追放された。二人は夫婦になつて祝町に店を開いた。

万助は、昼は刀を目立たぬように押入に入れ、夜は二階に上がり、梯子を外した、と。

万助は、祝町に引越してひと月にもならないうちに、兄弟に討たれたことになる。

一方鉄蔵は矢嶋家から暇をと

り、村松町の医師印牧玄順の若党

医者には御殿医と町医とある。印牧は勿論町医である。医者のお見舞」と言う。歩行で往診の時は葉箱(葉籠)を挟箱に入れてお供がそれを担う。鉄蔵の仕事はお供であつたろう。駕籠で行くときは葉籠を駕籠の中に入れる。駕籠かきを陸尺(ろくしゃく)という。

医者のとこで働いていれば人の出入りが多いから、万助の行方の手掛かりが得られるかもしれないと思つたら、鉄蔵の目論見通りおゆくがやって来た。しめた、と喜んだが、おゆくは深川黒江町の道具屋松五郎の嫁になつていて、万助との繋がりは無かつた。

松五郎は、毎日午後六時ころ湯屋に行く。その通い道で、彦兵衛方で病氣養生中のおゆくを見初めた。そこで彦兵衛に掛け合つて、おゆくも承知して松五郎の嫁になり子供もできたのだつた。

黒江町 現在永代二丁目。浜十三町の一つ。町域を黒江川が流れていたので、黒江町といつた。化政期、家数四九七軒。明治期に川が埋め立てられ、深川への市街電車が開通してから繁華な地になつた。

湯屋 幕末期の江戸には湯屋が約六百軒あつた。自分の家に

風呂のある家はよほどの大町人だつた。湯屋の数は規定があつて、大体一町に一軒くらい。平日は早朝より客をいれ、日が暮れて点灯して二時間くらい、つまり五ツ時になると表を閉ざした。大人が三十文くらいで子供は半額。二階が休憩所になつていて、湯茶をだしたり、菓子を買つたりしていた。将棋や碁盤なども置いてあつて、結構庶民の社交場であり、娯楽場であつた。その状況は式亭三馬の『浮世風呂』に活写されている。

しかし、この二階風呂は、菓子代だのご祝儀代だのとかかなり不経済であつた。ある風呂屋が二階も石榴口(ざくろくち)もやめてから次第に二階風呂が減つてゆき、明治も十年代になると殆どの湯屋が現代風の銭湯になつた。

湯屋について詳しいのは『浮世風呂』と、東洋文庫『絵本江戸風俗往来』、それに西沢一鳳『皇都午睡』である。

こうしておゆくは、万助と縁が切れてからは、仇討物語の舞台から全く姿を消す。

第七章 浅田兄弟、水戸へ

富士御師中村伊織と云へる者を以養母より申越けるは

鉄蔵は、ついに万助についての

情報を得て門次郎ともども水戸に向かい、仇を討つことになる。情報を伝えたのは、富士御師中村伊織であった。富士とは富士講のこと。御師は御持師の略で、おしと読む。伊勢では「おんし」と言う。

### 一、富士講

富士信仰は、山神浅間大神を仙元大菩薩と見なす仏僧たちが登山することから始まった。

本地垂迹思想がここにも見られる。日本古来の山岳信仰に密教が結びついて、修験道が発達した。富士講は富士信仰の登拝・寄進の組織で、江戸時代に江戸を中心に発達した。

平安時代後期には、僧末代が久安二年(二四〇)富士山頂に大日寺を開き、富士は伊豆走湯(伊豆山)と並ぶ、東国の著名な修練行の霊場となった。

近世初頭には、村落に定住する山伏が増え、民衆と霊場とを繋ぐ役割を果たした。

大声で、大祓・禊祓・般若心経・富士講経文御歌などを唱え上げ、九字を切り、修験道や密教の護摩供養に似たお焚きあげをする。

江戸幕府は「山伏法度(はつと)」を定めて、東密、台密両派を公認し、そのいずれかに山伏を分属させた。富士山はもともと両派に重んじられた霊場であった。

江戸時代には、江戸の町々から富士山がよく見えた。富士の麗峰は江戸の人々の憧れの的であった。一月三日の早朝に富士を礼拝し、六月一日のお山開きには、家々の軒下で線香を焚いて富士を遙拝した。富士と江戸の人々との間には、強い心の結びつきがあった。そうした庶民の間に生まれた民間宗教が富士講である。

講の組織者は江戸時代初期の長谷川角行で、彼は元和六年(一六三〇)江戸に「つきたおし」と呼ばれる奇病が発生したとき、「おふせぎ」を人々に授けて治病の実をあげた。彼は、仙元大日を信仰することで天下は太平になり、一家は繁栄し、病苦は退散すると説いた。

中期に食行身祿(じきぎょうみろく)こと伊藤伊兵衛と村上光清が出て布教を進めたが、やがて二派に分裂した。

食行身祿は油の行商人で庶民の暮しの苦しさをよく見ていたから、貧しい者が安らかに暮らせる四民平等の世の到来を願って、家業に励み、心を平らに持つことを説いた。

こうして富士講は、中下層の商人・職人・農民の自主的組織として発達し、江戸を中心に関東の各地に広まった。江戸中に数十の講中あり、一つの講中は五十戸から

百戸に及んだ。

### ☆ 富士登山

一講中の三人から六人ほどが実際の富士登山をした。白木綿の行衣を着て、手つ甲脚絆、草鞋、白の鉢巻きで、名玉を連ねた数珠をたすき掛けにして、講中の印の付いた菅笠を被り、金剛杖をつく。講中は先達に率いられて吉田口から登拝する。

新宿大木戸から甲州道を行き、八王子、高尾山に詣で、小仏峠に抜け甲州路に入り、富士吉田の御師宅までが三日の行程。

吉田には御師宅が八十軒ほどあり、富士講はすべての御師かに所属する。御師は神職で先達の認可や行名の授与を行なう。

山腹の石室に一泊して山頂に達し、帰路は須走口に下山。それから足柄峠を越えて関本へ出、道了尊に参詣、大山雨降神社に詣で伊勢原に下り、藤沢から品川に至る。この八日にわたる旅の苦しさを、「富士へ一度登らぬ馬鹿、二度登る馬鹿」と江戸の人は言った。

### 富士塚

こんな難行苦行が誰にも出来るわけではないから、江戸の人々は江戸府内の社寺に富士塚を築いて富士に見立てて、正式のいでたちで登拝した。

初めて富士塚を作ったのは高田馬場の植木屋藤四郎で、安永八

年(一七五九)、稲荷の境内に高さ五メートルの築山を富士講信者たちと共同で作った。

藤四郎は日行青山と号した富士講の先達であった。かれは富士登山するたびに、山頂の土を持ち帰り、富士塚に使用した。

老人、女、子供をはじめ足弱の人たちがここに登って拝むことが流行となり、護国寺(文京区大塚坂下町)、目黒、深川八幡社、駒込、浅草富士横町などを初めとして、各地の神社や寺の境内に富士塚が築かれた。低いもので二メートル、高いものでは十二メートルほどに土を盛り、登山道に見立てた曲がりくねった道に富士山の溶岩を置く。六月一日には富士祭に群集が集まり、火防(ひぶせ)の麦藁作りの蛇を商う店が立ち並んだ。

富士塚の現存するものだけでも四二基あり、そのうち三基が「重要有形民俗文化財」に指定されている。平野栄次の『東京都の富士塚』によると、明治以後昭和十一年までに三十五できて、都内に現存するもの三十九という。

幕府は講の繁栄と独自の教義に疑惑を抱き、嘉永二年、講を厳禁した。明治維新後、「扶桑教」「実任教」となったが、大正十二年の大震災で激減した。

現在では横浜市と三浦半島の

一部にわずかに残っている、と。  
〔神奈川県史〕

中村伊織 は浅田家とは懇意であつたらしい。『常陸の仇討』と『浅田兄弟仇討』の門次郎の口上書に、

富士御師中村伊織と申者親類大沢修理太夫様に相勤罷在候加藤静馬弟牧太と申立  
とあり、門次郎の身分の証明に使っている。

中村伊織は、『九兵衛の母』によると、富士の大宮に住み、養母キクの従兄の子だと。その伊織が江戸にきて、小田原の義母からの伝言を伝えた。水戸の宮川多吉を頼って尋ねれば、万助の居所が分かるというから、兄弟にすぐ水戸に行け、という。

『警撃実録』では中村伊織は実にこまめにそして誠実に兄弟に協力している。兄弟の武家奉公に奔走し、仇の消息を江戸まで知らせに来てくれる。伊織の家は六、七代前から伊織筑前といったと。そして小田原ではもっぱら伊織で通っていたと。

宮川定兵衛悴多吉と申者子細ありて先年隠居致しける。養母の縁つづきなる者也。当時常州府中に居住す。

この文の内容は、『警撃実録』を一読すると了解できる。

常州府中新地中宿といふ所に小田原家中新宿組(しんしゅくぐみ)宮川某が隠居同じく太吉といふもの六七年いぜんすこしわけありて今は隠居いたし役は養子にゆづり居しが此人大久保家の料理方をつとめるゆへ料理を好みねがわくは其の道の妙を得んとて修行の心にて諸国を遍歴して廻り常州水戸海道新地の中宿といふ所の料理茶屋に居たりあるとき成滝万助何方へ行けんこの茶やに立ちより休むべしとて入り来りしを宮川太吉居合わせて是を見付心あるゆへ太吉はかくれあはざるなり

『常陸の仇討』によると、正月に養母が内々に江戸にきて、ある巡礼が万助を常州で見かけた、と知らしてくれた。三月にも来て詳しく話してくれと言っていた。そして四月に中村伊織が来て、すぐ水戸に出発するように、と言ってきた、と。

中村伊織のように、諸国を歩いて情報を耳にする事の出来る親類を持ったことも、兄弟にとつて幸運であつた。討つ方も討たれる方も、相手の情報を先に得た方が有利であることは言うまでもない。

『警撃実録』に従つて、兄弟の

水戸へ出発するまでを辿る。太吉は、万助発見の報せをどうやって小田原に届けるか頭を悩ませていると、たまたま村の名主が伊勢参宮に行くというのを耳にした。名主は、行きは東海道經由、帰りは中山道だという。名主の所には料理を運んだこともあつたので、見ず知らずというわけではない。早速浅田宛の書面を認めて名主に頼むと、快く引き受けてくれた。

手紙は無事代官町の肴屋庄助に届き、庄助は宮川定兵衛に手渡す。定兵衛はそれを直ちに浅田キクに届けた。キクは伯父中村弁左衛門に相談することにした。しかし中村は万助と同じ組なので、キクが中村宅で話していると怪しまれる恐れがある。そこで中宿町宗吉方で相談した。

たまたま中村伊織が祈祷に回つてきたので、伊織も交えて、それが江戸の兄弟に報せに行くかという事になった。伊織が祈祷してみるとキクがいいと出たが、伯父は、キクが出掛けると近所の人に怪しまれるといい、結局、怪しまれずに往来出来る伊織が行く事になった。

伊織は夜を徹して江戸へ向かい、翌日は江戸馬喰町佐野屋惣右衛門方に泊まった。翌朝早く矢倉御屋敷の馬場を訪れ事情を話し、

印牧方に行くと鉄蔵は往診に供して不在。鉄蔵が帰り次第馬場方に到ると、勝右衛門も不在であつた、と。

こうして鉄蔵は印牧方を出奔する。出奔は主家に対する大罪となる。本人だけでなく、紹介者である勝右衛門も、責任をとることになる。

几帳面な鉄蔵は心を痛めた。所持の衣類を売った金を勝右衛門に渡して、「あとのふなり是なきよふ取り扱玉われ」と頼み、印牧には「申し訳のかどかど手紙に認め勝右衛門え相頼」む。「あとのふなり」のふなりは「不形」で、恰好の悪いこと。次の「本望達し候沙汰承り候はば彼の地よりひきやくにて届候ふりに取斗くれ候様」といさいたのみ置きける」がよく分からないが、本望を達したら飛脚で勝右衛門に知らせるから、そうしたらこの手紙を印牧に届けてくれ、ということらしい。ふりは、やり繰りの意。

門次郎の方も直ぐに暇をとり、儀右衛門から助言を受け、饒別は謝辞し、今までの恩に厚く礼を述べて、鉄蔵と合流し、二人は江戸表を出立した。(つづく)

## じいさんは「関東大震災被害報告」の警察官

井上 仁男 きみお

私は昭和十二年生まれで七十才になります。生まれたところは小田原町幸町一丁目一二九番地、鐘撞堂の近くです。定年で勤めをやめたのが平成九年、それから五年ほどタバコ屋井上商店をやっていました。

## 井上家三代

じいさん(晃)の話からしますか。じいさんは明治十六年、高座郡渋谷村の生まれで、名は晃。小田原の荻窪の高橋ヨウと結婚して小田原に所帯を持った。そこが緑町二丁目二〇八番地で、のちに幸町に移ってきたようです。じいさんは小田原で警察官をして大正十五年に亡くなりました。

じいさんは関東大震災時に人命救助や、警備などで苦勞をしたらしく、「関東大震災被害報告」の中にも大震災当日の警察官配置員の一人として名が出てくる



じいさんの顔

し、三島に軍隊急派を要請した人物としても登場します。

この絵は、記憶にあるじいさんの写真はこんな服装してたつていうイメージだけで私が描いたんです。

私の父母はともに明治四十三年の生まれ。父親は金之助、小田原の小船の出です。金之助は十五歳で「かのや今井本店」の丁稚になり、その後その一番番頭やつてました。戦後の配給のときには随分羽振りがよかつたそうです。

昭和十一年に横須賀の海軍陸戦隊に入り、海軍は陸軍より男前が揃っている、と言っていました。南京・上海方面へ行き、同僚の多くが亡くなつたけれど親父は帰つてきた。しかし一切戦争の話はしませんでした。

親父の自慢は「消防自動車より俺の方が火事現場に駆け付けるのが早い」つてことでした。我家の前に消防署と火の見櫓がありましたからね。

お袋の名は美子で、晃とヨウの長女です。他に五人の弟妹達がいましたがみな早く亡くなつて、唯一ひとり成人したそうですが、関東

大震災当時十四歳で、梁の下敷きになつたと話していました。

昭和のはじめに開業した井上たばこ屋ですが、お袋は一人で結構なお客を取るんです。しかし商売のテクニクというのには現代風じゃないんですよ。自動販売機なんかとんでもない。値が高いものでもお客さんが直接手に触れるところに置いて、一対一の対面で直接お客さんに手渡す。しかもそのお客さんの名前を覚える。そして「有り難う御座いました」つて言う。これがお袋のやり方。今じゃこんな商売通じないですよ。

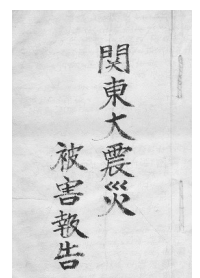
お袋は平成八年に八十六才で亡くなるんだけど、最後まで車椅子で商売やつてました。

店から見える検察庁の桜を見ながら、お袋はいつも「桜が今年も咲くなあ」つてね。だからその桜を「母恋桜」つて名前付けたんですよ。その桜が、今年も立派に花を咲かしてね……

お袋は私を含めて六人の子供を育てた。「子供六人が私の唯一の宝だよ」というのが口癖でした。

## 「関東大震災被害報告」

これは、表題の通りの本ですが、私が十年前に塚原に引越したときお袋が私に、「この本は唯一私の父親(晃)が残したもの。キミオや、あと何もないから持ってい



三代で保管していた資料

けや」と言つて渡してくれたものです。じいさんが小田原署の警察官だったからこの本が我が家にあつたと推測するだけです。

## 鐘撞堂界限のこと

戦争前後からの鐘撞堂辺りの話を少ししましょうか。

私はお濠で泳いでましたよ。お濠の水はきれいで鮎やヤマベもいました。そのときは十五人くらいのがキ大将でした。敗戦になつたとき兵隊さんが鉄砲とか弾をお濠に投げ捨てて帰るわけですよ。武装解除するときに敵に渡すよりは、と放り投げるんです。それを子供ながらに潜つてお濠の弾をおそろおそろ取つたりしましたね。

鐘撞堂界限は本当にね、みんな仲良くて温かい完全なファミリーなんです。飯なんかいつも近所でご馳走になる。勿論ご馳走もする。映画にあつたじゃない。そう、  
「Always 三丁目の夕日」の世界です。ピタリです。東京タワーのかわりに消防署の火の見櫓があつてね。そうして、夕暮れ時、鐘撞堂の鐘がゴーンと鳴るんだよ。いいねえ。

# 関東大震災被害報告(小田原警察署資料)

①

## 震災の一般的な状況、皇族貴頭の警戒

掲載にあたって

東日本大震災・南海トラフ地震被害想定等地震への関心が高まっている中、関東大震災時に小田原地方がうけた被害を学ぶ必要があります。

井上家で三代九十年にわたり保管されていた小田原警察署資料「関東大震災被害報告」はそれを知る貴重な資料です。井上仁男さん(前ページ)より記事参照の御好意により今号より抜粋掲載します。

原文は漢字・カタカナ文ですが読みやすいよう、漢字・ひらがな文とし、かつ枠内に概要を記しました。

なお本資料(26ページ「目次」参照)の正式名称は「小田原警察署管内震災情況誌」で、小田原、真鶴、湯河原各市史・町史に取捨選択掲載されていることを付記しておきます。

### 一 震災當時に於ける

#### 部内の一般的状況

大正十二年(一九三三)九月一日、小田原・箱根方面は皇族・華族・名士の避暑客で賑わい、県会議員選挙が開かれた日でもあった

時既に立秋に入りたりと雖も、残暑猶燬(や)くが如く、小田原・箱根・國府津・湯ヶ原・真鶴等には猶避暑客充満し(中略)

(以下滞在地・氏名について記述されるが、同じ内容の表を下記に掲載する)

殊に當日は土曜日にして一月後れの八朔に相當せり。

小田原第一小学校に於ては文武館の發會式あり、其他部内各村の小学校に於て暑中休暇明けの始業式あり。

又縣會議員の選挙運動は將に酷ならむとし、中原に鹿を逐ふべく馬を陣頭に進めつ、ある小田原町の秋澤嘉蔵(政友)、小林斂企(憲政)、豊川村の河野治平(政友)、下中村の船津愛之助(政友)、同村の石塚幸太郎(政友)等の候補者は此の休日を利用して一斉に活動を開始すべく前夜来より運動員等の総動員を行い、事務所に於ては徹宵策戦謀議を凝し、朝来より運動員は蜘蛛の子を散らすが如く八方各々目指す村落に向ひ運動を開始せり。

豫め斯くあるべしと予知し居りたるを以て、八月三十日よ

り高等係を増員し彼等の計画に備へ、當日は午前九時署員一同に對し選挙取締に對する大綱を示せり。

又一面に於て前夜来より降りたる雨は名残りなく晴渡り、雨晴後の天候は一入残暑猛烈なるものあり。

此土曜・日曜は休日は又も避暑客殺到し、小田原・箱根方面は雑沓を極むるに至らむと思

惟せられ、併せて之れをも訓示せり。

突如として空前絶後の大地震に襲われ、焦熱地獄と化した

時計の針は將に正午を指さむとする午前十一時五十八分、突然一大音響耳朶(じだ)を鼓つ、

當時部内御滞在中の皇族・貴頭名士

御滞在御避暑地名・旅宿名	爵位官職学位職業	氏名
小田原町幸一丁目御別邸	皇族	閑院宮戴仁親王殿下
全	全	全 妃智恵子殿下
全	全	全 寛子女王殿下
全	全	全 華子女王殿下
湯本村湯本岩崎男爵別荘	全	北白川宮富子大妃殿下
温泉村底倉富士屋ホテル	全	久邇宮朝融王殿下
小田原町十字二ノ三九四所有別荘	子爵陸軍大將	大島義昌
全町十字二ノ二八九所有別荘	枢密顧問官	安廣伴一郎
全町十字二ノ二八九所有別荘	貴族院議員	室田義文
全町十字二ノ二〇四所有別荘	男爵貴族院議員	瓜生外吉
全町緑一丁目八居宅	貴族院議員	田邊輝實
小田原町十字三ノ五四五所有別荘	實業家	野崎廣太
大窪村板橋七三一所有別荘	男爵	益田孝
温泉村塔ノ沢福住旅館	伯爵	大村純雄
温泉村底倉所有別荘	男爵	郷誠之助
全村富士屋ホテル	法學博士	稲田達吉
全村奈良屋旅館	實業家	田中虎之助
全村小涌谷所有別荘	男爵	三井八郎右衛門
芦ノ湯村松坂屋旅館	代議士	鈴木梅四郎
宮城野村強羅倉田別荘	伯爵	嵯峨公勝
貴族院議員	伯爵	奥平昌恭
時の外務大臣夫人	橋本勝之助	橋本勝之助
早川村二八七所有別荘	子爵	内田政子
片浦村江ノ浦貸別荘	男爵	交野時正
小田原町十字二丁目別邸	代議士	井田磐楠
酒匂村酒匂松壽園内	男爵	横田市太郎
		大倉喜八郎



焦土と化した小田原の町  
(木暮次郎「小田原の古きよき頃」)

ハツと思ふ瞬間激しき上下動起り地震を直感す。  
周圍一面は壁落ちて崩壊する響と共に、土煙濛々(もうも)として咫尺(しせき)を辨せず、地は裂け山は崩れ海は怒り風は狂ふ、壮麗無比の大廈(た)いか高樓も何んの権威かある、瓦舞い家倒る、響きは轟然四境を愕かす。

嗚呼天柱茲に折れ地維亦劈(つんざ)く、大浪に漂ふ敗船の如く生物の全部が恐怖と戦慄に満ち、阿鼻叫喚は随所に涌き起り、猛火は烈風に煽られ竜巻起り、火柱は天に沖し、紅蓮の焰は街より街に飛び、餘震は絶へず襲来し、頼みに思ふ水道は

断絶し、衣のみ着の儘の民衆は右往左往に逃げ惑ひ雑沓混乱、呼吸は喘き眼は血走り、跣々(そうそう) 踉々(ろうろう) 疲勞困憊、斃る、もの、傷くもの、焼かる、もの、親を求むる児、児を呼ぶ親、妻は夫に別れ、夫は妻を喪ひ、老ひたるものは躓き、幼なきものは號泣し、此の世なからの焦熱地獄修羅の巷を現出し、空前絶後の凄惨を極め、地球上の萬物が壊滅終焉するにはあらざるかと極度の失望を成さしめ、大自然の威力を恣に發揮し、人類の此の大自然に対する如何に其無力なるかを痛感せしめたり。

小田原で四百の死者、片浦以南では津波、また根府川では列車が海中に落下等大惨事となった。

即ち小田原町五千百餘戸は凡て全潰し、至る所に大亀裂を生じ、火災に依り町の中心二千三百戸を焦土と化し、約四百の死者二千の重傷者を出し、

真鶴村真鶴港四百六十餘戸、温泉村宮ノ下三十餘戸、早川村三十餘戸等しく焼失シ、剩(あまつさ)へ片浦以南は海嘯に襲われて流失せし者數知れず、鉄道熱海線を運轉中の東京發真鶴行下り列車は根府川駅

にて停車場諸共崩壊して海中に沈み、乗客駅員約四百名の殆んど全部が相模灘の藻屑と消へ、真鶴發上り列車は根府川鉄橋南隧道にて崩潰の爲め機関車埋没せられ、早川以南全線のレールは殆んど全部断崖の崩潰と共に海中に落ち、

片浦村米神・根府川の両部落は其の大部山津波に襲はれて埋没せられ、當時部落に居合はせたる人畜皆な永劫百尺以下の地下に埋まりて發掘不能となり、  
岩村・福浦両村の一部又埋没し、小田原駅にては機関車地中深く埋没し、酒匂・石橋・根府川の各鉄橋は見る影もなく墜落轉倒し、国府津より鴨宮迄の線路は潰れて其の形を失ひ、東海道本線に於ては国府津駅を發車せしみの十七輛連結貨物列車は田島村にて轉覆し、下曾我駅を始め全線其の跡を止めざる迄崩潰陥没し、農村の草葺人家は何れも倒潰して恰かも編み笠を伏せたるが如し。

箱根方面は交通・通信とも杜絶状態となった。  
小田原署管内で千七百名の死者を出す大惨事となった

一方天下の絶勝箱根は湯本より宮ノ下に至る国道及登山電車線共に全線崩潰墜落或は埋没し翠色滴たるが如き全山何れも崩潰して赤禿となり、通信機関は全滅し、交通杜絶し、人家皆倒潰し、續く余震に身を以て逃かれ部落外れの竹林を唯一の安全地帯として避難し、旅人は其の故郷や自宅の安否を氣遣い、此の先如何なる災害の襲ひ来るならんと現に体験したる恐怖より一層深刻なる未来の恐怖に陥り、部落へに一團となりて不安の一夜を明す様、寧ろ死したる方勝れりと語るものを生じ、何人も生き心地なく只死を待つが如き状況なりき。

此の災害に依り部内通して一千七百名の死亡、四千三百八十名の重傷者を出せり。

## 二 震災及火災発生時に於ける警察官署として執りたる応急処置

中略

### 二四 避難民の避難指導

震災當時小田原町に於ては海岸寄りには海岸に、幸町・十字町方面は十字町の山手に、緑



町・新玉町方面は谷津及停車場並に第三小学校・足柄村中島の田の中へ避難方指導し、其後海嘯襲来の風説盛にして又無下に排斥すべきものならざるを以て、海岸避難者に就ては山手方面廣場に避難の安全なるを告知し、主として第一・第三小学校跡に收容するに努め、署員を派して避難の指導をなしたり。

二二五 御滞在中の

皇族貴顕の警戒

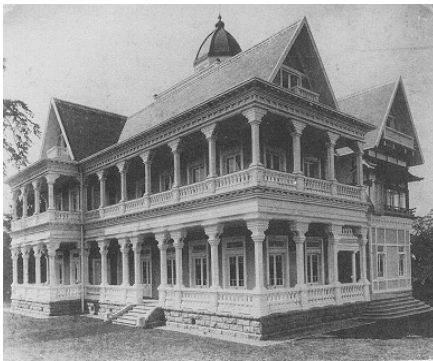
閑院宮御一家の御警衛

四年前に完成したばかりの閑院宮別邸も倒壊・発火。両殿下・女王殿下を救出すべく警察・医師らが駆け付けたものの、寛子女王は即死された

閑院宮殿下・同妃殿下並に寛子女王・華子女王殿下には八月末小田原御別邸御成滞在中なりしが、強震と共に御別邸崩潰間もなく料理室より発火し、殿下並に御一統の御身辺甚だ憂慮するものあり、即ち署長は身を以て街路に避難、直ちに署員の部署採るべき一般方策を指示し、其俣巡查二名を引卒馳せ

参じたるに、載仁親王殿下は安部属官の御先導に依り御邸内庭上に立たせ給ふも、他殿下の御姿は見へざりしを以て直ちに御機嫌を伺い奉り御見舞を言上したるに、妃殿下並に女王殿下未だ殿内に御在すの故を以て救ひ出すべき御命に依り、部下を督して家従等と協力、妃殿下並に華子女王殿下を御救ひ出すを得たるも、寛子女王殿下の御姿は猶發見する能はず、時恰も火災は漸次燃へ廣がりて崩潰せる本館に延焼せんとして寛子女王殿下の御救出上困難なるものあり。

殿下は「寛子發掘迄火災を大ならしむる勿れ」と畏れ多くも御心を悩ませ給ふものあり、即ち恐懼して消火に努め、署員數名を更に呼び寄せ辛ふじて御即死せられたる寛子女王殿下の御死骸を發見御救ひ出すと

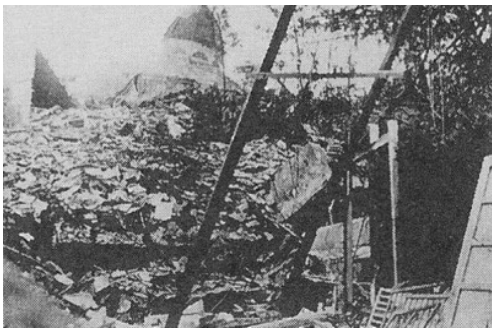


震災4年前に完成した閑院宮別邸  
小田原市立図書館「一枚の古い写真」

共に、鎮火せしむるを得、續いて侍女属官等の死体並に負傷者を救ひ出し、御邸前松樹の下に御座所を設けて一時御避難の場所に當て、後巡查二名を御身辺警衛として配置し、医師間中直七郎を招致し妃殿下の御負傷、寛子女王殿下以下の御手當を為さしめ、

急遽、駆逐艦夕風で閑院宮御一家が帰京された

猶御帰京御迎ひとして軍艦派遣請求の手續を為すべき御命を拜して帰署、別記の通り署員の指揮に當りたるが、帰来後神子警部補以下數名の巡查を御別邸に派し警衛に従事せしめ、更に薄暮邸内竹林中に御避難場設置に當り、福田警部補等を派して天幕其他の準備を為



倒壊した別邸  
「小田原市史通史編 近現代」

さしめ、爾後御帰京迄巡查二名を専従御警衛に當らしめたり。

一面殿下の御命に依り二日未明御帰京用として駆逐艦回航方海軍大臣及横須賀鎮守府司令長官に請求書を發し巡查を特派し、大磯署を経由至急傳通の途を講じたるに、三日午後五時駆逐艦夕風来航二付き御乗艦御帰京遊されたり。

北白川宮故能久親王妃

富子殿下の御警衛

湯本岩崎別邸に滞在されていた北白川宮妃殿下は救出され、閑院宮御一家と共に小田原より駆逐艦夕風で帰京された

同妃殿下には六月十七日より湯本村岩崎別邸御避暑なりしが、當時洋館階上に御休憩中激震の為め崩潰家屋に蔽われたるも、御附の安東属に依り御救出庭前の廣場に御避難遊されしを以て、駐在高橋巡查・助勤菅原巡查をして警衛に任じ置きしも、其後帰京を急がせられ、駐在巡查をして御帰京途中の模様御聞き出でに付き、交通機関全く破壊せられ徒歩又至難なるのみならず、混乱の折柄御帰京の御不安なる旨申上げ

しも、今月三日御不安に思召され全所より御避難の御決意固きものあり、遂に小田原町に御下りあり。

午前十時菅原巡查御警衛随伴し小田原町に御着ありしを以て、箱根口假事務所天幕内に御休憩を乞ひ、部内の状況を言上、其後小田原御用邸内消毒所に一時假御避難場の設置に當り、小野警部・田丸巡查部長をして準備申上げしめ、先ず御休憩を乞ひ、警衛巡查二名を配置したるに、午後五時駆逐艦夕風當署の要求に基き閑院宮殿下御迎ひとして来航したるを以て御同列御帰京を乞ひ、閑院宮殿下御一家と共に御乗艦御帰京の途に就かせられたり。

久邇宮朝融王殿下の御警衛

箱根宮ノ下富士屋ホテルに滞在されていた久邇宮朝融王殿下は沼津御用邸に避難された

同宮殿下には八月十日より箱根宮ノ下富士屋ホテルに御滞在中なりしが、幸ひホテルは崩潰を免れたるを以て、御無事に同家庭内自動車内に御避難遊ばされたる旨報告ありたるを以て、直ちに同村派出閑巡查部長及駐在巡查太田長信をし

貴頭の警戒

て御警衛に當らしめたるが、同殿下は九月三日朝御出發、芦ノ湯、元箱根、箱根町を経て沼津御用邸に御避難せられたるを以て、太田巡查をして途中御警衛を申上げしめたり。

小田原に滞在していた名士達の安全を確認、警戒を続けた

貴頭紳士の部内滞者在者前項列記の通りにして、内小田原町及大窪村板橋方面へは男爵益田孝・子爵大島義昌・枢密顧問官安廣伴一郎・貴族院議員室田義文・同田辺輝實・同男爵瓜生外吉・実業家野崎廣太等滞在中なりしを以て、災害突發後一時巡查を派遣して警戒せしめ、之等に対する不穩形勢なきと署員人少の關係上幾ばくならずして全部引揚げ、其後警邏員をして時々臨所警戒せしめ、殊に夜に入りては臨所警戒の度數を増さしめ、署長は自ら之等名士の家庭を訪問、當地に於ける大体の状況及知り得たる京濱地方の状況を通報し、然して村落滞在中の名士に対しては各受持員に命じて相當警戒の任に當らしむる等努めて慰安の方法を構したるが、名士中には

特に感謝の意を表明せられたる者あり。猶瓜生男爵邸に於ては家人々少に加へて男爵病臥中なるを以て、夜間は邸内在住の巡查長田中次郎をして警戒せしめたり。(つづく)

閑院宮寛子女王他皇族の御災厄を報道する大阪毎日新聞(九月四日)



閑院宮寛子女王殿下

皇族方の御災厄

各宮家の御別殿崩壊

閑院宮寛子女王、賀陽宮大妃好子三殿下薨去、東久邇宮第二王子、山階宮妃殿下は御危篤

閑院宮御一家は小田原御別邸に御同時に御避難あらせられたが逃げ遅れた寛子女王殿下は無残にも壓死を遂げられた賀陽宮大妃好子殿下も山階宮妃佐紀子女王殿下と鎌倉別邸で御災厄に遭はせられ大妃殿下は御即死佐紀子女王殿下は御重傷の後御危篤に陥られ鶴沼の東久邇宮妃並に各若宮殿下は辛くも御避難になつたが其際第二王子師正王殿下は遂に御即死あらせられた

た皇族高階隆雄由電報

Table with 15 items: 一 関東大震災被害報告 目次, 二 震災時に於ける部内の一般的状況, 三 震災及火災發生時に於ける警察官署として執りたる應急處置, 四 警部補派出所巡查部長派出所及重なる市街地又は惨害多き地に於ける派出所又は駐在所に於て執りたる處置, 五 震災又は火災の概況, 六 火災發生の状態, 七 震災時に於ける罹災者の避難状況及場所及警察官の避難地指導の状況及其の概數並びに避難し得ざりし者の救護處置, 八 震火災中悲惨を極めたる場所及其の惨状, 九 罹災者救護の處置及状況, 十 軍隊急派の要求と軍隊の配置, 十一 震災時に於ける署内の状況, 十二 交通の障害と復旧, 十三 電力事業の破壊及復旧, 十四 震災時に於ける刑務所の状態及拘禁囚の解放, 十五 警察署に於て施設計画したる事項及之が實行状況並に効果, 十六 震災に関する美談哀話

## 小田原史談会 初詣の御案内

恒例の初詣を下記のように計画しました。みなさま是非参加ください。

**日時：**平成25年1月17日(木)

**集合：**小田原駅西口 午前8時出発(7時50分までに集合) 小雨決行

**帰着：**午後6時頃(予定)

**コース：**高幡不動 たかはた 高幡山明王院金剛寺といい、東京都日野市にある  
真言宗智山派の別格本山。  
成田山、大山と並んで関東の三不動のひとつ。  
日本民家園 全国から古い民家を集めた野外博物館

**会費：**6000円(当日、現金で集金いたします。)

**受付：**12月21日(金)午後1時~22日(土)まで

**電話** 0465-34-3939(史談会受付窓口 勝俣)で受け付けます。

日本民家園などたいが歩きますので歩きやすい服装で参加しましょう。

保険証(コピー可)をご用意ください。

### 旅のつれづれ俳句日記

剣持芳枝

それはもう、ふた昔前にもなる旅の思い出である。一度黒部アルペンルートに行きたいわねと、日頃友人と話していたのだが、丁度念願叶っていいツアーがあり早速申し込んだ。はじめ八月の予定が台風のため九月半ばになった。さわやかな秋風が肌に心地よい旅のはじまりだった。河口湖の辺りは台風のため道路が水びたしになっていた。諏訪湖畔で昼食となり食後は松本城見学となった。風格のあるさすが国宝の城だと感じ、歴史が偲ばれる思いだった。旧開智学校にも見学出来大正生まれの私には、懐しい小学校の国定教科書の数々を見ることが出来た。バスが大町に近づくにつれ、山々がだんだん大きく目の前に開けてきた。大町温泉のホテルに着いて部屋に到着した。

#### 白樺の道暮れなすむ白露かな

翌朝は素晴らしい秋空のもと、山の空気を思う存分吸い八時前にはホテルをあとにしてバスで扇沢に向った。此処まで来ると大分涼しいと云うより寒いようだった。三十分ほど待ってトローリーバスで黒部ダム駅へ、駅の長い階段を上ると、残雪の立山連峰を背景に黒部ダムの美しいアーチがひろがった。その素晴らしい景観には圧倒されるようだった。満々と水を湛えたダムを見ながらケーブル乗場までゆっくりと散策した。

#### 秋天に届かぬダムの飛沫かな

ケーブル乗場からは地下ケーブルで黒部湖駅へ、更にロープウェイで立山中腹の大観峰へ着いた。夏は高山植物秋は全山紅葉に染まるそうだ。ロープウェイから眺める黒部湖のエメラルドグリーンの美しさ、目前にそびえる山々の雄大な姿、本当に素晴しかった。一泊の旅なので大観峰からは又来た道を引返した。七年の歳月を費して竣工した黒部ダムの建設には、多くの犠牲者がおられたとか頭の下る思いである。立山黒部の大自然の風景に魅せられて、私の心に大きな希望が湧いてきたような気がして、いい旅が出来た喜びがひしひしと感じられ、何時までも忘れられない思い出の旅であった。

特別賛助会員

熱海 アオキクリニック

紳士服の アメリカヤ

税理士法人 報徳会計

伊勢治書店

かまぼこ

(株) オクツ薬局

小田原ガス

小田原報徳自動車

かまぼこ籠 清

(株)カネボウ化粧品小田原工場

かみやま小児科クリニック

興電社

小伊勢屋

(有)小松石材店

COMTEC コムテック株式会社

さがみ信用金庫

手打そば 小田原城趾前 田毎

のれんと味 ぶる海

◇ そびそ二宮

茶半家具株式会社

ちんぎょう本店

割烹料理 烏かつ楼

和菓子 菜の花

杉崎茂法律事務所

平井書店

(有) 古屋花店

株式会社 報徳

建築金物 (株)星崎仲吉商店

本多時計店

学生専科 丸 マルク

曾我の梅干 美の政

(株) アルファ

小田原史談(年四回発行)

創刊昭和三十六年一月  
会創立昭和三十年七月

禁断転載

振替

年会費 普通会員三千円  
〇〇二〇二一四三三六  
小田原史談会

小田原史談会ホームページ URL <http://odawara-shidan.hustle.ne.jp/>

小田原史談会

検索

落穂集

巻頭は、考古学者であり蒐集家でもある杉山さんに、コレクションの蘊蓄を楽しく書いて戴きました。掲載した画は全て杉山さんの所蔵品であることは言うまでもありません。私事ですが毎年、「中秋の名月を愛でる会」に参加しています。ところが今年には台風17号で中止、台風と満月が重なった際に起きた「小田原大海嘯」(平倉さん執筆)の記事を身につまされて読みました。石井さんからNHK・BS歴史館で大塩平八郎をやります。忠真も出て来ます」とのメールをいただきました。残念ながら忠真の場面は僅かでしたが、「郷土史再発見」を読んでいただと良く分かります。「関東大震災被害報告」は被害報告としては勿論、大正十二年九月一日、小田原に居た人達が被害直前にどのような生活していたのか、手に取るように分かる歴史資料です。ところで長年にわたる形式を変え、今号からA4版としました。いかがでしょうか? 字が大きくなって読みやすくなった、と言っていたかと編集者としては嬉しいのですが。今後小田原史談をお楽しみ下さい。

編集者